

生活・総合

第36号



令和7年度
埼玉県連合教育研究会
埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会

まえがき

埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会
会長 藤田恵子

埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会は、平成2年度の発足以来、会員の皆様の熱意ある取組の継続、また教育行政関係の皆様の多大な御理解・御協力をいただいて、充実した活動を積み重ねてまいりました。昨年度、8年ぶりに「関東地区小学校生活科・総合的な学習教育研究会関東大会」を本県熊谷市で行いました。そこで提案された「つなぐ・いかす・深める～ワクワクする本物の学び～」の実践が、現在県内の多くの学校に広がりつつあります。また、本年度は集合型授業研究会とオンライン会議を合わせながら、本研究会を推進してまいりました。ご尽力いただきました指導者並びに会員の皆様、お世話になりました関係の皆様に、心より感謝申し上げます。

本年度は、主に以下のような事業を実施いたしました。

1 総会及び講演会 <6月18日：オンライン開催>

- ・総会は、オンラインにて行いました。円滑な議事進行のもと、昨年度の事業報告・決算報告、本年度の事業計画・予算案が承認されました。
- ・講演会では、文部科学省初等中等教育局 主任視学官 田村 学先生より「次期学習指導要領における生活科・総合的な学習の時間に求められるもの」という演題で、御講演をいただきました。250名を超える参加がありました。論点整理・大臣諮詢をもとに、学習指導要領の構造化、探究の質的向上のための手立て、柔軟な教育課程の編成についてご講義いただきました。

2 第34回研究発表会 <7月31日：オンライン開催>

- ・生活科の1実践と総合的な学習の2実践、合計3本の実践提案と研究協議を行い、淑徳大学教育学部 教授 岡野 雅一先生より指導講評をいただきました。提案に対して、効果と今後の見通しについて具体的に御指導をいただきました。

3 本研究会委嘱による授業研究会

- | | | |
|----------|------------|--------------|
| ・入間地区 | 所沢市立北秋津小学校 | 11月20日【生活】 |
| ・北埼地区 | 加須市立大桑小学校 | 11月26日【総合】 |
| ・北足立南部地区 | 新座市立栄小学校 | 1月20日【生活・総合】 |

各地区及び授業研究校では、貴重な授業提案と熱心な研究協議が行われました。指導者の先生方には丁寧な御指導をいただき、各地区の研究推進・研究交流が図られました。

4 指導事例集第34集の刊行 <2月>

県内各地区から推薦された指導法研究委員が、2年間にわたり研究・実践し執筆した原稿を、オンライン会議にて検討を重ねて編集しました。児童生徒の興味関心を生かした実践が数多く紹介されています。広く県内各校での実践に御活用いただけたら幸いです。

結びに、本会報の発刊にあたり、御尽力いただきました編集委員の皆様並びに事務局の皆様に厚く御礼を申し上げ、挨拶といたします。

あいさつ

埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課 主任指導主事 高橋 史行

埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会におかれましては、令和7年度も諸事業を通して大きな成果を認められ、ここに研究収録を刊行されること、心よりお喜び申し上げます。また、本県の生活科、総合的な学習の時間の学習指導の充実に、多大な御尽力をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

今年度本研究会では、所沢市立北秋津小学校、加須市立大桑小学校、新座市立栄小学校において授業研究委嘱校発表会を実施するとともに、教育研究発表会や指導法研究委員会を開催し、授業を基にした研究協議や実践研究の提案が数多く行われました。本研究収録にまとめられている、今年度の素晴らしい成果をぜひ多くの方に御活用いただき、県内小・中学校等における生活科及び総合的な学習の時間の授業改善の一助となりますことを期待しております。

さて、今年度埼玉県では、昨年度作成いたしました小学校の実践追加事例に引き続き、中学校の実践追加事例を作成いたしました。3つの事例を取り上げ、各事例のポイントを分かりやすく丁寧に説明しています。令和8年3月に県のホームページに掲載する予定でございます。本研究収録と併せて御活用いただければ幸いです。

現在、文部科学省中央教育審議会教育課程企画特別部会では、次期学習指導要領の改訂に向けて議論が行われております。その中で、「自らの人生を舵取りする力と民主的な社会の創り手の育成」が課題として提起されています。その解決の具体策の1つとして、総合的な学習の時間を中心とした質の高い探究的な学びの実現が示され、生活、総合的な学習・探究の時間ワーキンググループにおいても引き続き議論されています。県としても動向を注視し、適宜情報共有を行ってまいります。

結びに、県内の生活科及び総合的な学習の時間の学習指導のより一層の充実と、本研究会のますますの御発展を祈念し、挨拶といたします。

さいたま市教育委員会学校教育部教育課程指導課 主任指導主事 本川 耕

令和7年度埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会の諸事業が多大な成果をあげ、ここに研究収録が刊行されることに心からお祝いを申し上げます。また、日頃より本市の生活科、総合的な学習の時間の充実のために御尽力いただいておりますことに心より御礼申し上げます。

今年度、本研究会では、引き続き「児童の気付きや概念的理解を質的に高める指導の工夫」を研究主題として掲げ研究を進めてこられました。生活科における「気付きの質」や、総合的な学習の時間における「概念的理解」の高まりについて考察し、児童生徒が変容したきっかけについて分析とともに、教師の適切な支援についても整理しようとする本研究は、児童生徒の変容と教師の支援の関係を明らかにするとともに、体験活動と表現活動を充実させるための具体的な取組を整理するものであり、大変すばらしい成果をあげられました。本研究収録には、これらの研究成果をはじめ、生活科、総合的な学習の時間の授業のあり方を具体的に示唆する充実した実践が掲載されております。さいたま市教育委員会といたしましては、今後も、埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会における取組や、県内の優れた授業実践等を市内に紹介するとともに、「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善の推進に努めてまいります。

結びに、この研究収録が各学校においてより多くの先生方に活用され、埼玉県及び本市の生活科、総合的な学習の時間の指導が充実されることを期待するとともに、埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会がますます充実、発展されますことを御祈念申し上げ、挨拶といたします。

～ もくじ ～

まえがき	埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長	藤田 恵子	1
あいさつ	埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課主任指導主事	高橋 史行	
	さいたま市教育委員会学校教育部教育課程指導課主任指導主事	本川 耕	2
もくじ			3
卷頭論文	総合的な学習の時間について「考えるのは、今でしょ！」		
	埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会 前会長	竹森 努	4
1	指導法研究委員会 指導事例報告		8
2	第34回生活科・総合的な学習の時間教育研究発表会報告		33
3	授業研究委嘱校報告 所沢市立北秋津小学校		37
	加須市立大桑小学校		
	新座市立栄小学校		
4	令和7年度講演会記録		42
5	事業報告		46
6	埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会会則		47
あとがき	埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会副会長	萩原 美樹	
編集委員の構成			49
令和7年度役員・理事一覧（別紙）			

総合的な学習の時間について「考えるのは、今でしょ！」

埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会
前会長 竹森 努（松伏町立松伏小学校長）

1 はじめに

小学校に総合的な学習の時間が誕生して、27年目となった。他教科と比べると、学問的にも、学校文化的にも、まだまだ若くて、浅い領域であると言える。昭和22年（78年前）の小学校学習指導要領の制定の教科（国語、算数、社会、理科、家庭、図画工作、音楽）からすると、未開の領域である。言い換えれば、総合的な学習の時間は、今こそ見直しを重ね、広め深めていくことが大切であると言える。

私は、平成10年の7回目の学習指導要領の全面改訂の前の、平成9年研究開発校として「総合的な学習の時間（仮称）」の研究に関わることができた。当時は、埼玉県越谷市立越ヶ谷小学校と香川県綾川町立陶小学校の2校が、平成9年11月文部大臣より「教育方法の改善に関する調査研究」の委嘱を受けた。そこで、はじめて「総合的な学習の時間」の柱と授業づくりに取り組んだ。まずは、総合的な学習の時間が生まれた背景と当時の方向性を振り返ってみたい。

2 総合的な学習の時間の創設の経緯

平成8年7月の中央教育審議会第一次答申において、「これからの中学校教育の在り方として、〔ゆとり〕の中で自ら学び自ら考える力などの〔生きる力〕の育成を基本とし、教育内容の厳選と基礎・基本の徹底を図ること、一人一人の個性を生かすための教育を推進すること、豊かな人間性とたくましい体をはぐくむための教育を改善すること、横断的・総合的な指導を推進するため「総合的な学習の時間」を設けること、完全学校週5日制を導入すること」などが提言された。

この答申を受け、平成10年12月学校教育法施行規則において「小学校の教育課程は、国語、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭及び体育の各教科、道徳、特別活動並びに総合的な学習の時間によって編成するものとする」と定め、総合的な学習の時間は各学校における教育課程上の必置の内容として位置付けられた。しかし、総合的な学習については、各教科のような学年ごとの細かな指導内容の定めではなく、趣旨やねらい、学習活動、実施にあたっての配慮事項等が「総則」の中に定められたのみであった。

中央教育審議会第一次答申（平成8年7月）から、当時の中央教育審議会は、今後の教育の在り方について、子供を取り巻く状況を踏まえ、以下の内容が答申された。

＜創設期の「総合的な学習の時間」を取り巻く状況＞

- ①学校生活、塾や自宅での勉強にとられ、ゆとりのない生活
- ②友人、兄弟姉妹の数の減少による生活体験・社会体験の不足
- ③自立の遅れ
- ④適切な生活行動への知識や実践力の不足
- ⑤過度の塾通いやいじめや登校拒否の問題
- ⑥核家族化や少子化の進行
- ⑦地域の教育力の低下

これからの社会の展望変化の激しい、先行き不透明な厳しい時代として、以下の5点が挙げられていた。

- | | | |
|---------------|-------------------|----------|
| ①国際化の進展 | ②情報化の進展 | ③科学技術の発展 |
| ④環境問題、エネルギー問題 | ⑤高齢化、少子化、男女共同参画社会 | |

こうして、ここに、横断的・総合的な学習の文言が登場した。更に、「今日、国際理解教育、情報教育、環境教育などを行う社会的要請が強まっているが、これらはいずれの教科等にもかかわる内容を持った教育であり、こうした観点からも、横断的・総合的な指導を推進していく必要性は高まっていると言える」と社会的要請への対応の重要性について挙げ、「このため、上記の視点から各教科の教育内容を厳選することにより時間を生み出し、一定のまとまった時間を設けて横断的・総合的な指導を行うことを提言したい」と総合的な学習の時間の創設の必要性について述べられている。

さらに、「この時間における学習活動としては、国際理解、情報、環境のほか、ボランティア、自然体験などについての総合的な学習や課題学習、体験的な学習等が考えられる」「その具体的な扱いについては、子供たちの発達段階や学校段階、学校や地域の実態等に応じて、各学校の判断により、その創意工夫を生かして展開される必要がある」と、活動内容について示し、「このような時間を設定する趣旨からいって、「総合的な学習の時間」における学習については、子供たちが積極的に学習活動に取り組むといった長所の面を取り上げて評価することは大切であるとしても、この時間の学習そのものを試験の成績によって数値的に評価するような考え方を探らないことが適當と考えられる。さらに、これらの学習活動においては、学校や地域の実態によっては、年間にわたって継続的に行なうことが適當な場合もあるし、ある時期に集中的に行なった方が効果的な場合も考えられるので、学習指導要領の改訂に当たっては、そのような「総合的な学習の時間」の設定の仕方について弾力的な取扱いができるようにする必要がある」と、その取扱いについてこれまでの教育の枠組みにとらわれない視点が示された。

3 総合的な学習の時間の現状と課題

平成10年・11年の小・中学校学習指導要領改訂から、1回の改訂（平成20年の改訂）と2回の一部改正（平成15年一部改正、平成27年一部改正）を経て、総合的な学習の時間について見直されながら、全国の小中学校に広がってきた。先進的に研究している学校や総合的な学習の時間に関心の強い教員の学級では、深くて楽しい総合的な学習の時間が展開されている。

しかし、その一方で、27年前の総合的な学習の時間の創設当時のままの授業を行っている学級・学校が多いことも事実である。令和6年度関東地区小学校生活科・総合的な学習教育研究会埼玉大会における埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会の基調提案として、「総合的な学習の時間の現状」を以下のように述べている。

- 本気で取り組める課題が設定されていなかったり、実社会との関わりが足りなかつたりして、子供が自分事として取り組めていない。
- 子供たちと教師にとって、学習材が身近であり、必要感のあるものが選ばれていない。
- 年間指導計画が形骸化されており、見直しがされていない。
- 情報収集をICTに頼りすぎており、地域に出て、人やものと多く関わっていない。
- 探究の過程が意識されておらず、整理・分析のないことがある。
- 考えるための技法（思考ツール）を活用することができていない。

実際に私自身が関わらせていただいた近隣の学校の総合的な学習の時間について、担当している先生方から多くの悩みを聞くことがあった。そのいくつかを挙げてみる。これは、実際の生の声である。

- 単元をどう作っていけばよいのかわからない。単元づくりに子供の声をどう吸い上げていけばよいのかわからない。
- 学年のテーマを学校で決めている。（6年がキャリア、4年が福祉…）これでいいのか。
- 課題設定の方法がわからない。教師の投げかけ方はどこまで行って良いのか？
- 子供達一人一人が学びたいことが違う場合、どのように授業を進めていけば良いのか。
- いつも探究サイクルが1サイクルで終わってしまう。

- 生徒の興味の持たせ方が難しい。(中学校)自分と関係ないからと思い、本気になってもらえない。
- 総合的な学習の時間が大切だということをどのように保護者に理解してもらえばよいのか。(親からは「総合より国算をやってほしい」という声もある。)
- 外部との連携に準備時間がかかりすぎてしまう。
- 下位の子達の支援をどのようにしたらよいのか。
- 探究的な学習に力を入れたいが、時数が取れない。

こう見ると、多くの教員は、「総合的な学習の時間」についての概要はうっすらと把握しているが、実際にどのようなところをねらい、どのように授業を作り上げていくのかがわからず、多くの教員が苦しんでいることがよくわかる。働き方改革が進む中で、これまでの総合的な学習の時間の全体計画、単元計画、授業構想などが、長きにわたり更新されず日々進んでいるようである。

4 総合的な学習の時間の自校の見直しポイント

(1) 学校としての「総合的な学習の時間」全体計画の見直し

全体計画が形骸化してしまった学校がかなり多くなっている。そこで、私が最も大切にしたい項目は、「全体計画の中心となる3要素」の中でも、『探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力』である。これは、自校でどんな力を当該学年で身に付けるかということになるので、一般的なことを示すのではなく、その学年の【重点資質・能力】を明確にする必要がある。それが、学校として教員に周知され、実感されていないことが、総合的な学習の時間の目指す方向性が見えず、学習方法ばかりに、教員の目が向いている原因である。ここが、総合的な学習の時間の核となってくる。【重点資質・能力】が、曖昧で、各教員がもてていないため、「教え込んでよいのか?」「時間がない」といった悩みが出てくるのである。

(2) 単元計画の見直し

前述したように、単元計画の作成の難しさを実感する声が多い。教員は、教科書のように指導内容が決められていると、安心して指導に当たることができると言う。しかし、総合的な学習は、「身に付けさせたい資質・能力」も「学習材」も「学習展開」もすべて教員が見つけ出し、作り上げていかないといけないので、多くの教員が「授業づくりが難しい」と思っている。そこで私は単元計画の見直しの内容を以下の12項目を考えてみた。

単元計画の見直し内容	
1	どのような子供を育てたいかが明確か？（明確な目標）
2	どのような対象と関わらせるかが具体的で、絞られているか？（人・もの・こと）
3	どのようなことを学んで欲しいかを、教師がしっかりとっているか？
4	身近な学習材となっているか？（繰り返しが可能か）
5	子供が課題意識を持つような「きっかけ」を用意しているか？
6	体験活動を行っているか？（PCからだけの知識では、子供たちは本気にならない）
7	学級の共通テーマ（児童全員が目指す方向）がわかりやすいか？
8	「課題設定→情報収集（体験）→整理・分析→まとめ・表現」を複数回、繰り返しているか？
9	子供の思考（考え）を板書や掲示などで見える形にして、整理しているか？
10	子供が集めた情報を「整理・分析」する時間をとっているか？
11	整理・分析の方法を学ばせているか？
12	教師は、子供の様子から学び、授業を作っているか？

(3) 学習材の見直し

これが子供達にとって、学習が自分事となるかの最も重要なポイントである。では、学習材にどんなものを取り上げればよいのだろうか。今、自分の学校の総合的な学習の時間の年間計画に、「『ごみ問題』とあるから、これをやろう」では、子供の中から「問い合わせ」や「課題」が生まれてくるはずがない。教師が、子供たちと話し合い、導いていきながら、学習材決定をしていくことが大切である。学習材を決定する留意点は以下のようである。

- 1 誰もが課題をもつことができる
- 2 繰り返し体験できる
- 3 長い期間関われる
- 4 子供たちの生活に近い
- 5 保護者や地域を巻き込める
- 6 関わるほど違う側面が見えてくる<時に壁を与えてくれる>

学習材は、身近な地域から見つけることが有効である。学習材を「地域」から見つけ出す意義は以下に示す。

- ①地域に出る（社会に出ていく）活動を行うことで、「本物から学ぶ」ことができる。
- ②何度も関わることができ、1年間を通して、学習材の変化を子供たち自身で実感できる。
- ③地域人材を通して、「地域を愛する心」を育てることができる。
- ④学校として、地域施設や地域人材と継続的につながることにより、持続可能な総合的な学習を開拓することができる。
- ⑤総合的な学習の時間以外にも、地域に出ていく機会が増え、地域の活性化につなげることができる。

5 総合的な学習の時間の今後の課題

「総合的な学習の時間」が成立する3要素を以下に示す。

- ①答えのない問題について、子供が自ら課題を設定すること。
- ②その課題を解決するために、探究のプロセスを経由すること。
- ③その結果として、自分の考えを明らかにしたり、さらなる課題が生まれたりして、課題解決が繰り返されること。（新たな問い合わせが生まれる）

多くの総合的な学習の授業の質を高めるためには、以下の点が課題であると考える。

- ア 学校全体計画を見直し、目の前の子供達に身に付けさせたい力の再検討を行う。
- イ 教員自身が、地域の学習材で探究した経験がないため、校内研修として、地域学習材開発に関する学びを学年ごとに行う。
- ウ 保護者に総合的な学習の時間を積極的に公開し、保護者の理解を広げていく。

6 おわりに

総合的な学習の時間が小学校に導入されて27年が経った。しかし、全国の公立小中学校においては、総合的な学習がまだ、地を這いまわっているように私は感じてならない。全国で総合的な学習の時間の実践者は多く生まっているが、もっと一般の教員に総合的な学習の価値が理解され、効果的な授業実践が広まってほしい。そのためには、子供達のために学校と社会をつなごうとする教師集団や学校や自治体がもっと出てきてほしいと願っている。

引用・参考文献

清見嘉文（広島文化学園短期大学） 2017 創設期の「総合的な学習の時間」を取り巻く状況

埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会 2025

令和6年度関東地区小学校生活科・総合的な学習教育研究会埼玉大会研究紀要

竹森努 令和6年度「埼玉教育」第4号 総合的な学習の「学習材」は地域から！そこから本物の学びへ！

1 指導法研究委員会 指導事例報告

[活動内容]

生活科と総合的な学習の時間の授業における指導方法や評価方法について研究し、学習指導に役立てることを目的とする。

[実践事例]

【生活科（板書編）編】

- ◆幼児期の経験を生かして、児童が主体的に学んでいくための板書等の工夫（小1）
- ◆気付きの質を高め、本物の学びにつなげる板書等の工夫（小2）

【生活科（発話分析）編】

- ◆季節の移り変わりを実感し、表現を通して学びを深める発問の工夫と発話分析（小1）
- ◆見つけた！を大切に楽しみながら探究的に学ぶ発話分析（小2）

【総合（課題の設定）編】

- ◆自分事になる課題設定の工夫（小3）
- ◆地域と連携し、交流や体験活動を通じて、児童の意欲を喚起する課題設定の工夫（小4）

【総合（情報の収集）編】

- ◆地域人材を活かした体験活動を通しての情報収集の工夫（小3）
- ◆ICT機器の活用と中間発表会による情報収集の工夫（中3）

【総合（整理・分析）編】

- ◆地域と共に創する学びを、生成AIで深める整理・分析場面での工夫（小4）

【総合（まとめ・表現）編】

- ◆生徒が自身のチカラに気付き、ジブンゴトとして地域に働きかけるまとめ・表現の工夫（中1）

[委員構成]

顧問	埼玉大学名誉教授 元文教大学教授 共栄大学名誉教授・共栄幼稚園長 埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課指導主事 さいたま市教育委員会学校教育部教育課程指導課指導主事 元埼玉県生活科教育研究会長 元埼玉県生活科教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 元埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 前埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会長 所沢市立山口小学校校長 春日部市立中野小学校校長 熊谷市立大麻生小学校校長 久喜市立久喜東小学校校長 幸手市立さかえ小学校校長 さいたま市立南浦和小学校校長 さいたま市立植水小学校教頭 研究委員	林信二郎 嶋野道弘 若手三喜雄 古畠隆憲 持木沙和子 斎藤和男 浅見恒夫 吉澤操 島貫克彦 野口一夫 名倉稔夫 山田直樹 大友みどり 小川聖子 石橋桂子 井原政幸 中居武司 田中京子 竹森努 藤田恵子 安東由美子 栗原敏枝 田上智明 坂本信之 茂木千春 山口徹志 山崎綾希子（小川町立八和田小学校） 腰塚典子（熊谷市立新堀小学校） 篠崎絵理菜（行田市立桜ヶ丘小学校） 林大輔（久喜市立久喜小学校） 金山智玲（久喜市立鷺宮小学校）
会長		
編集長		
副編集長		
幹事	横田典久（埼玉大学教育学部附属小学校） 鈴木康平（埼玉大学教育学部附属小学校）	

指導事例（1）

小学校【第1学年】どきどきわくわく1ねんせい 【4月】

～幼児期の経験を生かして、児童が主体的に学んでいくための板書等の工夫～（8時間）

1 評価計画の作成について

（1）単元の概要

本単元は、学習指導要領の内容（1）を受けて設定したものである。学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支える人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して遊びや生活をしたり安全な登下校をしたりしようとする態度を育成することをねらいとしている。

入学したばかりで、学校という新しい環境に大きな興味を抱いているこの時期に、学校生活に関する様々な疑問を出し合い、話し合って解決していく活動を行うことで、幼児期の経験を活かして自信をもって生活できるようになると考える。特に、学校の決まりや約束、友達との関わり方について学ぶ活動では、児童の幼児期の経験を問い合わせ、それを基に小学校での生活を共に考えていくことで、安心して主体的に自己を発揮できるようにする。また、自分たちで考えて決めた約束を振り返る活動を通して、約束を自ら守ろうとする意識を高めるとともに、これまでの自分たちの成長に気付き、これから的生活へ願いをもって意欲的に生活しようとすることができるようとする。

（2）単元の目標

学校生活に関わる活動を通して、幼児期の教育での経験を思い起しながら、教室で生活したり、友達と関わったりし、学校の施設の使い方や友達のよさに気付くとともに、友達や先生と学校生活を過ごすことの楽しさを実感し、安心して遊びや学習をしていこうとすることができるようとする。

（3）単元の評価規準

内容項目【（1）学校と生活】

		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準		学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の使い方や友達のよさに気付いている。	学校生活に関わる活動を通して、幼児期の教育を思い起こしながら共通点を見付けている。	学校生活に関わる活動を通して、友達や先生と学校生活を過ごすことの楽しさを実感し、安心して遊びや学習をしていこうとしている。
小単元の評価規準	1	①物の置き場所や持ち物に関することなど、教室の使い方に気付き、決まりを守っている。	①幼児期の経験を思い起こし、小学校での約束や決まりを見付け、伝え合っている。	
	2	②友達と仲良くするための接し方や友達のよさに気付いている。	②幼児期の経験を思い起こして、友達との関わり方について見付け、伝え合っている。	①友達との関わりを通して、安心して友達と仲良く過ごしていこうとしている。
	3	③学校の施設の特徴に気付いている。	③幼児期の経験と比べながら学校の施設の特徴を見付け、伝え合っている。	②学校の中を歩き、見付けたことを自分なりの方法で自信をもって伝えようとしている。

			③学校生活の楽しさを実感し、学校の決まりや約束について意欲や自信をもって学習しようとしている。
--	--	--	---

※本単元では、小学校という新しい環境でも安心して生活できるよう、スタートカリキュラムとして、

「ほっこりタイム（安心感をもち、新しい人間関係を築いていくことをねらいとした学習）」、「わくわくタイム（学校や学習に慣れることをねらいとした学習）」、「ぐんぐんタイム（教科等を中心とした学習）」を行う。特に4月第1～2週目にかけては「ほっこりタイム」に重点を、第3週～4月末頃にかけては「わくわくタイム」に重点をおくようにし、5月以降にはぐんぐんタイムも積極的に取り入れるようにした。また、小学校の疑問をみんなで解決する時間を「どうするこうするタイム」と名付け、朝の会等の学級の時間の中で行うこととした。

時間	4月第1週～2週目	4月第3週～4月末頃まで	5月～7月頃
ねらい	心をほぐし、友達や先生と仲良くする。	自分でできることは自分で行い、他学年にも関わりを広げる。	学校のリズムで行動し、自己を発揮する。
♥	ほっこりタイム ♥		
😊	わくわくタイム	😊	
tent	ぐんぐんタイム		tent

入学してからの一週間の予定(例)

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
行事	入学式	特短日課	特短日課		発育測定
1時間目	入学式 行事 1	ほっこりタイム ・朝の支度 ♥ ・使い方等 ・室内遊び ・読み聞かせ (余剰 1)	ほっこりタイム ・朝の支度 ♥ ・使い方等 ・室内遊び ・朝の会 (余剰 1)	ほっこりタイム ・朝の支度 ♥ ・自由遊び ・使い方等(余剰 0.5) ならびっこ【体 0.5】 😊	ほっこりタイム ・朝の支度 ♥ ・自由遊び ・使い方等(余剰 0.5) ならびっこ【体 0.5】 😊
2時間目	学活 1	【音 0.5】歌って踊って仲良くなろう 名まえを教えよう 【国 0.5】 😊	【書 1】もじたんけんたい 😊	【生 0.5】校庭探検 人数集め【算 0.5】 😊	【生 1】学校めぐり 😊
3時間目		下校はどうするの?! 【学 1】 😊	【書 0.5】名まえを書こう 下校班でならばう 【学 0.5】 😊	【体 1】遊具遊び 😊	校歌を歌おう【音 1】 😊
時数/余剰	2/0	2/1	2/1	2.5/0.5	2.5/0.5

本単元は、「はじめましてきょうしつ」「はじめましてともだち」「はじめましてがっこう」の3つの小単元を設定している。小単元の内容は次の通りである。

①「はじめましてきょうしつ」（主に入学から1～3日目）

朝の支度をする中で、困ったことを出し合う。それらを分類し、荷物の置き場所、引き出しの使い方、水道やトイレの使い方等に分ける。次に、幼児期の経験を共有しながら小学校ではどうするか話し合い、よりよいやり方を決める。話し合って決めたことは「どうする？こうする！1年生」の表にまとめ、一日の終わりには、決めたことを守って生活できたか振り返るようにする。

②「はじめましてともだち」（主に入学から4～6日目）

「ほっこりタイム」での児童の様子を取り上げ、友達と仲良くする方法について話し合う。また、友達と遊んだり生き物探しをしたりすることで、話の聞き方や並び方、仲直りの仕方について話し合って決める。決めたことは「どうする？こうする！1年生」の表にまとめ、一日の終わりに振り返りを行う。

③「はじめましてがっこう」(主に入学から7日目～)

これまでの学校での生活を振り返り、調べてみたいことを出し合い、実際に探検に行く。その後、気付いたことを伝え合い、絵に描いて表現することで、学校施設の特徴に気付けるようにする。また、教科書を見て見付けたものを話し合ったり、線をなぞる活動や数を数える活動を行ったりすることで、授業の進め方や決まりについて確認していく。決めたことは「どうする？こうする！1年生」の表にまとめ、一日の終わりに振り返りを行う。

単元の最後には、「どうする？こうする！1年生」の表を見て、これまで自分たちが見付けてきた疑問や解決してきたことを整理しながら振り返る。また、これまでの自分自身の成長に気付けるようにする。

(4) 単元の指導と評価の計画（8時間扱い）

時間	「小単元」 ◎ねらい ○学習活動	小単元の評価規準との関連	評価規準から想定した具体的な児童の姿 評価方法
2	「はじめまきてきょうしつ」 ◎教室で過ごす中での決まりや約束を少しずつ覚えながら、楽しく過ごす。 ○朝の支度をする中で困ったことや疑問に思ったことを出し合い、整理して話し合う。 ○物の置き場所やトイレの使い方、下校の仕方等について話し合って決めたことをまとめる。	知一① 思一①	・物の置き場所や持ち物についてなど、教室の使い方を理解している。 行・発・□ ・ <u>幼児期の経験を思い出して、小学校での約束や決まりを考え、伝え合っている。</u> 発・□ (具体例①)
3	「はじめましてともだち」 ◎友達と一緒に学習やいろいろな活動をすることに关心をもち、意欲的に取り組む。 ○自己紹介を行い、名前を覚える。 ○「ほっこりタイム」で遊んだ経験から、友達と仲良くするための方法について考える。 ○みんなで教室の中で遊んだり、校庭の遊具で遊んだりする。	知一② 思一② 態一①	・友達と仲良くするための接し方や友達の良さに気付いている。 行・発・□ ・幼児期の経験を想起し、友達との接し方について考え、伝え合っている。 発・□ ・友達との関わりを通して、安心して友達と仲良く過ごしている。 行・□
3	「はじめましてがっこう」 ◎自分のことは自分でやろうとし、教室だけではなく、学校全体へ関わりを広げる。 ○これまでの学校での生活を振り返り、気になつたことや調べてみたいことを出し合う。 ○実際に探検に行き、見付けたものを伝え合ったり絵に描いたりする。 ○授業の進め方を確認し、決まりや約束について話し合う。 ○入学してからこれまでの生活を振り返り、できるようになったことを整理してまとめる。	知一③ 思一③ 態一② 態一③	・学校の施設の特徴に気付いている。 発・□・力 ・幼児期の経験と比べながら学校の施設の特徴を考え、伝え合っている。 発・□ ・学校の中を歩いて見つけたことを自分なりの方法で伝えようとしている。 発・□ ・ <u>約束や決まりの良さを実感し、自分から決まりを守り、安心して学習しようとしている。</u> 行・発・□ (具体例②)

行・・・行動観察

発・・・発言

□・・・つぶやき

力・・・カード

2 評価の実際について

具体例① 発言・つぶやきから思一①を評価する

○小単元における評価規準

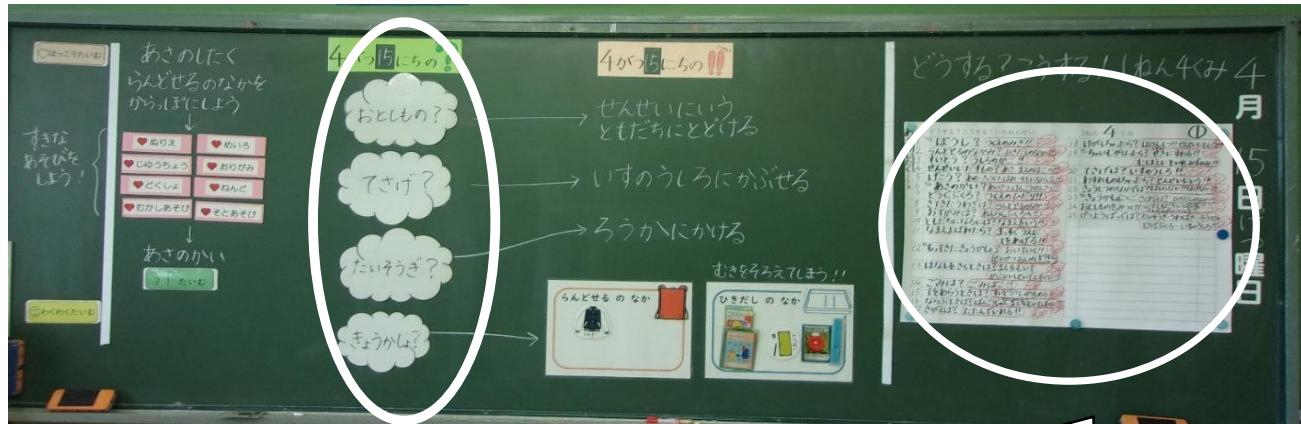
幼児期の経験を思い出して、小学校での約束や決まりを考え、伝え合っている。

○本単元に入るまでの支援

園からの引継ぎを参考に、幼稚園や保育園と似た環境を設定し、安心して生活できるよう工夫した。

また、持ち物の置き場所等を確実に理解し自分の力で朝の支度ができるよう、時間を十分に確保するようにした。

○実際の児童の姿と評価及び板書の工夫



○板書の工夫

出された疑問を仲間分けし、可視化した。また、話合いでお出されたつぶやきを拾い上げ、整理して板書した。話し合って決めたことは右の表にまとめ、児童が自ら守れた場合には花丸を付けて価値付けた。

○板書の効果

疑問を仲間分けしたことで、視点を絞って話し合うことができた。また、荷物の片付け方等について、イラストで説明したり、決めたことを一つ一つ表にまとめたりすることで、決まりを守ろうとする気持ちを高めることができた。

T「持ってきた教科書はどうしたらしいかな？」

C「しまう」「片付ける。」

T「どんな風にしまったらしいかな？」

C「すぐ使える場所がいいと思う。」

C「引き出しにしまうといいと思う。」

C「向きを揃えてしまうといい。」

どうする？こうする！いちねんせい

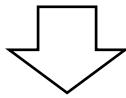
後半になると、授業のこと、当番等の役割のことなどの疑問が多く挙がった。

持ち物のことや教室での過ごし方など基本的なことを多く取り上げた。

※「どうする？こうする！1年生の表は、入学当初としては文字の情報量が多いが、自分の言ったことを書いてもらう喜びを感じ、さらに約束を守ろうとする意識につながった。また、書きながらしっかりと読み上げることで、音声によって確認するようにした。

○児童の姿

疑問を整理して提示したこと、一つ一つの疑問に対して、園での生活や先生との関わりを思い出しながら自信をもって意見を伝え合っていた。また、小学校での約束や決まりについて、その意味や理由を考えながら話し合ったことで、約束の意味を理解し、自分に自信をもって主体的に決まりを守ろうとしていた。



- ・小学校での約束や決まりについて、幼児期の生活を思い出して、約束の意味を考えながら自信をもって伝え合っている。(具体例①)【思-①】発・□

小学校での約束や決まりを考える過程で、それぞれの幼児期の生活を振り返り、約束の意味についても考えながら、幼稚園との違いや共通点に気付き伝え合っている児童の姿を「思考・判断・表現」の観点から、十分満足できる状況であると評価した。

具体例② 行動・発言・つぶやきから態一③を評価する

○小単元における評価規準

約束や決まりの良さを実感し、自分から決まりを守り、安心して学習しようとしている。

○本単元に入るまでの支援

「どうする？こうする！タイム」を日常的に行うことで、分からぬことや困ったことを出し合い、話し合って解決する活動を多く取り入れた。また、幼児期の経験を想起させながら話し合う中で、小学校との違いや共通点に気付き、幼児期の経験を生かして自信をもって生活できるようにした。「どうする？こうする！タイム」で話し合ったことは表にまとめて教室に掲示したことで、どうするべきか分からなくなったときには掲示を確認する姿も多く見られ、そのような姿を取り上げるようにした。

○実際の児童の姿と評価及び板書の工夫

Category	Note
きょうしつ (Classroom)	ごみは？ ⇒ごみ箱に捨てる！
電気は？	⇒気付いた人が消そう、付けよう！
そと (Outside)	外で遊ぶときは？ ⇒けがをしないよう注意する！
じゅぎょう (Gymnasium)	けがをしたら? ⇒保健室にいく！
きょうかしょ (Library)	国語・算数は? ⇒引き出しに入れる！
生活・音楽は?	⇒学校に置いていく！

※「どうする？こうする！1ねん4くみまとめ」では、表に書かれている項目を全て短冊に書き写した。一つ一つの解決策は児童が表を見て書き写し、それらを「朝の支度」「教科書（持ち物）」「給食」「下校」「授業」等の場面で仲間分けした。

○板書の工夫

これまで書き溜めてきた「どうする？こうする！1年生」の表を並べて提示することで、もっと見やすい表にするための視点に気付けるようにした。また、同じ種類のものをまとめていく過程では、約束同士の共通点やつながり等に気付けるようにした。まとめ直した表は、教室に掲示し、いつでも確認できるようにした。

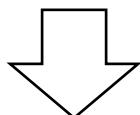
○板書の効果

表を見て、「ごちゃごちゃしていて見にくい」ということに自ら気付く様子が伺えた。また、「整理してもっと見やすい表にしたい」「クラスの約束を自分たちで整理したい」という意欲が高まった。約束を種類ごとに分けていく過程では、約束同士のつながりや、同じ場面でも順番があること等に気付く様子も見られた。

C「今までたくさん話し合って表に書いてきたね。」
C「でも、ごちゃごちゃしていて分かりにくい。」
T「どうしたらもっと見やすくなるかな。」
C「同じ種類にものを近くにしたらしいと思う。」
T「種類ごとにまとめてみよう。」
C「朝の支度だけでもたくさんある。」「休み時間は「外」と「友達」の約束も一緒に見たほうがいいね。」

○児童の姿

これまでの「どうする？こうする！タイム」の表を見て、見やすくするためにには同じ種類ごとにまとめる必要があると自分たちで気付き、約束同士の共通点やつながりを考えていた。また、「給食」「掃除」「下校」などそれぞれの場面について、どの約束を使ったら良いか表の中から探す様子が多く見られた。さらに、入学してから今までの自分たちの様子を振り返り、多くの約束や決まりを考え学んできたことに気付き、自信をもっている姿が多く見られた。



- ・約束を使う場面ごとに分けたり、まとめたりしながら、自分たちで決めた約束や決まりを自ら守ろうとしている。（具体例②）【態-③】行・発・づ

これまで話し合って決めた約束や決まりを振り返りながら、同じ場面で使う約束が他にもないか考えながら、約束を分類して再構成し、自ら主体的に約束を守ろうとする姿を「主体的に学習に取り組む態度」の観点から十分満足できる状況であると評価した。

実践を終えて

本単元では、幼児期の経験を土台に、安心して自己を発揮できる児童の育成を目指し、実践を進めてきた。小学校という新しい環境の中でも、幼児期の生活経験を元に疑問を解決していく活動を行うことで、小学校での約束や決まりを理解し、自信をもって生活する様子が多く見られた。また、幼稚園や保育園の環境を取り入れ、「ほっこりタイム」「わくわくタイム」「ぐんぐんタイム」を設定し、幼児期と似たような環境でスタートできるようにしたことで、小学校に対する漠然とした不安を軽減することができた。

今回の実践を通して、幼児期に学んできたことを発揮できるような場面を設定することの大切さに改めて気付かされた。また、一方的に決まりを教えるのではなく、児童に幼児期の経験を問い合わせ、一緒に考えていくことの大切さを実感した。話合いを円滑に進めるためには、児童の問い合わせやつぶやきを整理して板書するとともに、これまでの話合いの積み重ねが可視化できるような板書をすることが大切である。幼児期の学びと育ちを踏まえ、主体的に自己を発揮できるよう授業改善を図っていきたい。

指導事例（2）

小学校【第4学年】目指せ提燈祭りアンバサダー！～提燈祭りを埼玉一番の祭りに！～【4月～3月】 ～地域と共に創する学びを、生成AIで深める整理・分析場面での工夫～（100時間）

※授業時数特例校制度のもと、教科から30時間分総合的な学習の時間へ移行し、体験的な活動の充実を図った。

久喜市の伝統行事「久喜提燈祭り」のPR活動をテーマに、自分たちのまちに誇りをもち、地域を愛し、地域のために行動できる子供を育てることを目指した単元である。どの地域にも存在する「祭り」を題材に、日常に埋もれがちな魅力を掘り起こすという、子供たちの実態に即した探究活動を開催した。本校は久喜提燈祭りの開催地に位置し、地域コミュニティの中心的役割も担っている。こうした立地を生かし、体験活動を意図的に取り入れた教科横断的なカリキュラムを構成した。また、「整理・分析」の時間を充実させることを重視し、地域人材との複数回の共創活動を意図的に設定した。さらに、情報の可視化・共有・深化のツールとして生成AIを活用した。生成AIは、子供たちの意見や気付きの共通点・相違点を即座に整理し、さらに「探究の相談（対話）相手」として思考を広げ深める役割を果たした。

1 児童の実態と教材について

3年生までに、生活科・社会科・総合的な学習の時間を通して、子供達は地域についての学びを積み重ねてきた。特に、3年生の総合的な学習の時間「地域野菜マイスター」では、地元農産物のPR活動を通じて、地域とのつながりや人と関わることのよさを実感する経験を積んでいる。4年生の「イノベタイム」（本校における総合的な学習の時間の名称）の導入にあたり、「どのようなことを学びたいか」というアンケートを実施したところ、多くの児童が「地域の魅力」に関心を示し、中でも「久喜提燈祭り」が最も魅力的であるという回答が多数を占めた。そこで、埼玉県の祭りランキングを提示し、久喜提燈祭りが6位であることを伝えると、「くやしい」、「もっと知名度を上げたい」といった声が多くあがり、子供達の学びへの意欲を感じ取ることができた。一方で、「久喜提燈祭りの魅力は何か」と問うと、「当たり前だから」「有名だから」といった漠然とした回答も多く、具体的な魅力を把握していない実態も明らかとなつた。こうした状況を踏まえ、子供達に芽生えた「久喜提燈祭りの魅力を探り、知名度を高めたい」という思いや願いを生かし、4年生全員が“久喜提燈祭りアンバサダー”として、その魅力を広める活動に取り組むこととした。活動を通して、地域の伝統文化を受け継ぐ意義に気付き、地域に貢献しようとする態度の育成を目指して、本単元を設定した。

2 単元の目標

久喜提燈祭りについて調べたり、久喜提燈祭りの魅力をPRするための活動に協働して取り組んだりすることを通して、久喜提燈祭りの実態や久喜提燈祭りの伝統を守ろうとする人々の工夫や努力、思いを理解し、久喜提燈祭りの魅力を広げることについて考えるとともに、学んだことを自らの生活や行動に生かすことができるようとする。

3 探究課題

「地域の伝統文化である久喜提燈祭りとその継承や発展に力を注ぐ人々の思いや願い」

4 単元の評価規準

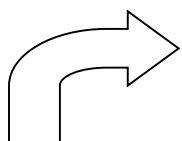
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 各地区的祭りの特色や久喜提燈祭りを守り続けようとする人々の思いを理解している。 ② 久喜提燈祭りの魅力を伝えるために、各地区的祭りの特色をパンフレットやグッズでPRしている。 ③ 久喜提燈祭りに関わる活動を行おうとする意識や行動の変容は、久喜提燈祭りの伝統を守ろうとする地域の人々の思いについて探究的に学習してきたことの成果であることに気付いている。	① 自分の関心をもとに久喜提燈祭りの課題を見いだし、解決方法を考えている。 ② 目的に応じた対象を明確にし、自分たちの身近なところから必要な情報を集めている。 ③ 久喜提燈祭りについて収集した情報を比較・分類したり数値化したりして、事象の関係性や特徴をとらえている。 ④ 久喜提燈祭りの魅力を伝えるために、久喜提燈祭りの魅力を分かりやすくまとめ、地域の人に表現している。	① 久喜提燈祭りを継承する人々、観光協会やケーブルテレビなどPRを実際にしている人のよさやPRに向けて自分の持ち味やよさを理解して、PR物を作成している。 ② 自他のよさや自他の考えを活かしながら、協働的に課題解決に取り組もうとしている。 ③ 久喜提燈祭りの継承と発展に力を尽くす人達との関わりを通して、自分にもできることを考え、行動しようとしている。

5 活動の流れ

久喜提燈祭りについて調べたり、久喜提燈祭りの魅力をPRするための活動に協働して取り組んだりすることを通して、久喜提燈祭りの実態や久喜提燈祭りの伝統を守ろうとする人々の工夫や努力、思いを理解し、多様な立場や視点から地域活性化の在り方について考えるとともに、学んだことを自らの生活や行動に生かすことができる。

97-100時間 総合年間の振り返り自分達の取組を振り返り、自己の成長・自己の変容を実感し、つなげる。

- ・探究活動を通して関わった人々の思いや願い、自分たちの成長を振り返る。
- ・自らの「イノベーション力」の変容を実感し、今後に生かそうとする意識を高める。
- ・地域への関わりの中で、「行動が変わった理由」を言語化し、探究的な学びのよさを実感できるようにする。



④まとめ・表現

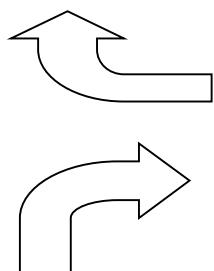
PR発表会や宣伝活動を実際に地域で行い、久喜提燈祭りの魅力を地域の方々に伝える。PR発表会を通して自分たちの思いを発信する。活動を振り返り、学びを言語化する。

小単元③提燈祭アンバサダーとして地域へPRを行おう！
(27時間) 1月～3月



③整理・分析

収集した情報を基に、対象と方法を明確にし、効果的なPRを考える。活動のねらいと役割を共有し、チームごとに計画を立て、実行に向けた準備を行う。

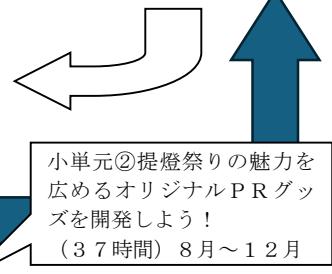


②情報の収集

市役所・観光協会などからPRの場や機会の情報を得て、ショッピングモールや駅、図書館、郵便局、商店街など活動場所を検討する。

①課題の設定

自分のオリジナルPRグッズを使って、提燈祭りの魅力を発信し、ランキングを上げるためにどこで・誰に・どのようにPRするかを具体的に検討し、計画を立てる。



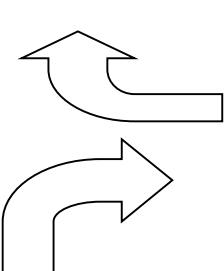
小単元②提燈祭りの魅力を広めるオリジナルPRグッズを開発しよう！
(37時間) 8月～12月

③整理・分析

アイデアを出し合いながら、自分たちに合ったPRグッズや方法を精査し、対象や場面に応じた効果的な表現方法を考える。

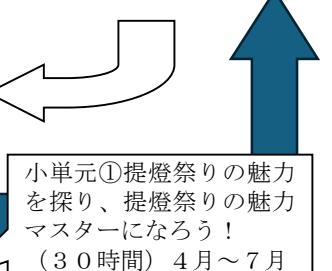
①課題の設定

誰に何をどう伝えるかを明確にし、PR活動の具体的な目標を定め、観光協会との連携やイベント参加の見通しを共有する。



②情報の収集

既存のPR事例の調査や追加のインタビュー、資料収集などを行ったり、他地域の成功事例を分析したりしながら、自分達の活動に生かす。生成AIを活用しながら客観的に活動をみつめる。



④まとめ・表現

久喜提燈祭りの魅力を自分たちなりに言語化してまとめ、今後の活動の方向性を話し合う。

小単元①提燈祭りの魅力を探り、提燈祭りの魅力マスターになろう！
(30時間) 4月～7月

③整理・分析

体験や調査を通して得た情報を、生成AIや思考ツールを活用して整理・分析し、共通点・相違点を見いだし、久喜提燈祭りの魅力と課題を可視化する。

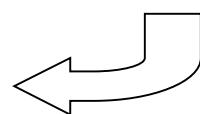
①課題の設定

「久喜の魅力とは？」「提燈祭りの価値は？」といった問い合わせから、探究の方向性を見いだし、全国の祭りとの比較やアンケートの分析を通して、課題意識を明確にする。



②情報の収集

提燈職人やお囃子保存会、観光協会、市役所、祭典委員会などへのインタビューを行ったり、山車引き・お囃子体験、通りの観察、地域住民へのアンケートなどの体験活動を行ったりする。



【単元を貫く課題】久喜提燈祭の魅力をPRするために、久喜提燈祭りの魅力を地域の人々と協働しながら探し、自分達なりの久喜提燈祭りの魅力を考え、久喜小4年生だからこそできるPR活動や盛り上げアイデアを考えて実践し広めていこう。

1～3時間 総合オリエンテーション

○今年の総合は何について学ぶか（何をするか）、子供の思いや願いを確かめる。また、一年間でどのような資質・能力を身に付けるのか教師と子供で共有し、今後の見通しをもつ。

6 単元の指導計画・評価計画（100時間扱い）

国語科を中心とした他教科と関連する必然性をもたせた教科横断的なカリキュラム編成を行う。

◎探究課題「地域の伝統文化である久喜提燈祭りとその継承や発展に力を注ぐ人々の思いや願い」

○これまでの学習との関連

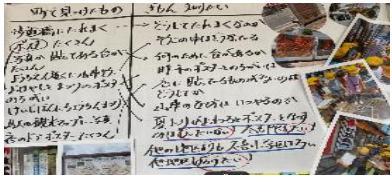
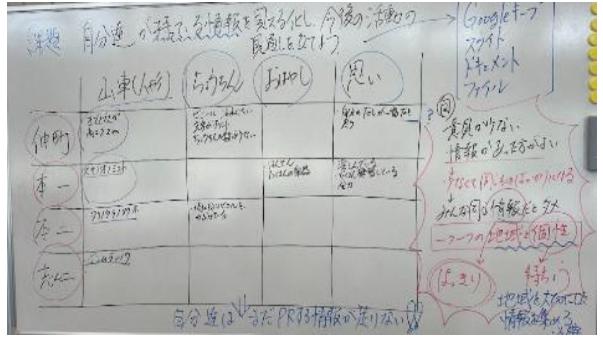
3年「地域野菜マイスター」（総合）

○当該学年での主な教科横断的な学び

国語「聞き取りメモの工夫」（情報収集前に位置付け、メモの取り方を学び、イノベで活用）

国語「新聞づくり」（整理分析後に位置付け、体験後のまとめ活動の題材として利用）

探究の過程	○学習活動 ・予想される児童の意識や姿 (時間)	○指導上の留意点	評価規準 評価方法
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○1年間の学びのオリエンテーションを行う。(2) <ul style="list-style-type: none"> ・どんな力を身に付けるかが分かった。 ・久喜市の魅力とは何だろう。 【小単元①提燈祭りの魅力を探り、提燈祭りの魅力マスターになろう！(30時間) 4月～7月】 ○久喜市の魅力をPRする活動を行う方向性を共有し、学習対象を決める。(2) <ul style="list-style-type: none"> ・提燈祭りが有名だね。PRしたいけれど、詳しく知らないな。すごいことは分かるけれど語れない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○子供達が思う久喜市の魅力アンケートを取り、魅力が提燈祭りにあると意識付けを行う。 ○埼玉の祭りランキングを提示し、空間軸でのずれの意識を子供たちに生じさせ、久喜提燈祭りに対する課題設定を行う。 ○提燈祭りのことを多く語ることができないことを子供達が実感することで、提燈祭りを調べる必然性を実感できるようにする。 	思① 発言記述
情報の収集※体験活動後に整理分析を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ○提燈祭りについて調べる。(3) <ul style="list-style-type: none"> ・インターネットや書籍で調べる。 ・実際に聞いてみないと分からぬ。 ○提燈祭りについて関わることを街に出で探す。(2) <ul style="list-style-type: none"> ・町探検でポスターやお店を見付けたよ。 ・山車や提燈、お囃子に関わっている人たちと話してみたいな。 ○情報を集めるアンケートを作成しよう。(2) ○お囃子や山車など提燈祭りに関わる人から学ぶ。(6) 	<ul style="list-style-type: none"> ○インターネットや本だけでは情報が集まらないことを実感するための話し合いの時間を設ける。 ○国語科「聞き取りメモの工夫」と関連付け、情報収集前に聞き取りメモの工夫を学び、総合的な学習の時間で活用・発揮するカリキュラムデザインを行う。 ○提燈祭り通り町探検により、提燈祭りに関するものがあるか探し、たくさんのポスターがあることに気付くようにする。 ○地域住民へのアンケートや提燈職人やお囃子保存会、観光協会、市役所職員、祭典委員会へのインタビュー、提燈祭り通り町調査、取材、山車引き体験、お囃子体験を行うことで、提燈祭りの魅力を探ることができるようになる。 ○GTからお囃子や山車、提燈、祭りの歴史や工夫、思いを伺えるように事前打ち合わせを行っておく。 ○子供が後から振り返ることができるよう、GTの話を模造紙に整理しておく。 ○生成AIにゲストティーチャーの話の分析を行わせ、要点としてでてきたテキストデータを子供たちの教材として準備する。 	思② 発言記述
整理	○収集した情報を整理する。(4)	○町探検やお囃子見学、体験、山車見学を通じ	思③

<p>分析</p> <p>※ 体験活動後に整理分析を行う。</p>	<p>○個人の分析を全体で共有し、問い合わせを見出す。(4)</p> <p>※それぞれの体験活動後に個人、全体で整理分析を行う。</p> <p>○体験や収集した情報と分析した結果から、提燈祭りの課題と自分達ができることについて話し合う。(2)</p> 	<p>て感じたことを整理し可視化する。</p> <p>○情報収集の後に、整理分析を位置付け、子供の気付きを整理し、思考を深める時間を設定する。</p> <p>○情報収集と整理・分析を繰り返すことで、新たな問い合わせが生まれ、その問い合わせのために再び情報収集へと向かうという、学びの流れに必然性が生まれるようにする。</p> <p>○住民へのアンケート、提灯職人やお囃子保存会・観光協会・市役所職員・祭典委員会へのインタビュー、提燈祭り通り町調査、取材、山車引き体験、お囃子体験などから久喜提燈祭りに対する課題や問題点を見いだすことでの、今後の見通しをもてるようとする。</p>	<p>知① 発言記述</p>
<p>まとめ表現</p>	<p>○GTの思いを受けながら、自分たちの提燈祭りに対する思いを話し合う。(2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提燈の魅力は各地区の違いである。その地区の違いをPRすることで、スタンプラリーのように祭りを違った目線で楽しめるようになると思う。 <p>○地元の祭りに参加し、情報収集を行う。(時間外活動)</p>	<p>○提燈祭りについて体験・調査した内容と自分達の思いをもとに、提燈祭りの魅力とは何かを話し合い、今後のPR活動の方向性や発信方法の概要をまとめる。</p> 	<p>態① 発言記述</p>
<p>課題の設定</p>	<p>【小単元②提燈祭りの魅力を広めるオリジナルPRグッズを開発しよう！(37時間)8月～12月】</p> <p>○久喜提燈祭りの課題を解決し、久喜提燈祭りをPRするための方法を検討する。(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地区ごとの魅力が伝わるグッズを作りたいな。 <p>○PRできる活動や市民祭りや提燈祭りPRイベントでのPR活動について観光協会の方と話し合う。(2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分達が行う活動に意味があるものなのか、教えてもらいたい。聞いてみて、アドバイスをもらいたい。 <p>○自分達の活動を進めるにあたって、情報が足りているのか考える。(1)</p>	<p>○STEAM教育の視点から、先端機器を用いたデジタルによるものづくりもできることを紹介し、アイデアとして活用できるようにしておく。(3Dプリンター、ドローン、デジタル版画版等は久喜市保有のものを借りる。)</p> <p>○観光協会の人の助言をいただき、子供達ならではの活動が価値あるものだと実感ができるようにしていく。</p> <p>○PR活動を行うための情報が足りているのか、マトリックスを用いて分析を行い、今後の見通しを立てる。</p> 	<p>思① 発言記述</p>
<p>情報の収集</p> <p>※情報収集をし、整理</p>	<p>○観光協会の方の思いを基に話し合い、決めたPR活動(3Dプリンタ活用によるグッズ作成・PR動画・デジタルPRチラシなど)に必要な情報をPRの専門家の方々から収集する。(4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手意識をもつことや自分達がPR対象のこと好きになること 	<p>○市役所シティプロモーション課の方をお呼びし、PRに必要な視点を教えてもらうように調整をする。</p> <p>○地域にあるケーブルテレビの方をお呼びし、PRに必要な視点と、自分達が考えたパンフレットやガチャガチャづくりがPRに</p> 	<p>思② 知② 発言記述</p>

分析を行う。	が大切。 ○自分達に足りない情報を収集する。(4) ○地元のイベントで情報収集に取り組む。(時間外活動)	ふさわしいかアドバイスをもらえるように調整する。 ○地元の祭典委員会の方からも PR 方法や祭りへの思いについて教えてもらえるように調整する。	
整理分析	○PR に向けて情報収集してきたことを整理し、自分達の活動を考える。(2) ○各グループに分かれて、PR に向けた活動を決める。(2)	○子供達だからこそできるアイデアを大切にするために、自由に行ってみたいことを発表することができるような声掛けをする。 ○学年総合から学級総合へ移行し、クラスごとの思いや願いを重視し、表現方法を選択できるように学年間で話し合う。	態② 思③ 発言記述
まとめ表現	○専門家の方々からの意見を基にして、自分達の思いが詰まった PR 活動への成果物を作成する。(8) ○自分たちで考えた PR 活動を祭典委員会や観光協会、商工会の方々に披露し、批判的思考に基づきアドバイスをもらう。(2) ○地元のイベントで提燈祭りの PR 活動を行う。(時間外活動)	○子供たちの作成するパンフレットや缶バッジ、キーホルダーは、本物とするために、業者に依頼をしたり、近隣の工業高校に作成を依頼したりする。 ○子供達はアイデアとデザイン、文章にこだわり、作成は専門家に任せることで、地域との共創を実現できるようにカリキュラムデザインしていく。 	思④ 発言記述
整理分析	○自分たちで考えた PR 活動を祭典委員会や観光協会、商工会の方々に披露し、批判的思考に基づきアドバイスをもらうことで、自分達の活動の方向性を分析し、PR 活動を修正する。(2)	○試作品ができたら、地域や専門家による評価を受ける時間を確保する。子供たちの作品が自己中心的にならないよう、祭典保存会や観光協会、PR 専門家から客観的な視点を取り入れるようにする。 ○評価を分析する時間を確保し、自分たちの考えと専門家の視点を比較しながら、最適な改善策を考えられるよう授業を構成する。 	思③ 態③ 発言記述
まとめ表現	○専門家の方々からの意見を基にして、自分達の思いが詰まった PR 活動への成果物を仕上げる。(8) ○ジュニアプレゼンアワードに参加し、提燈祭りの PR 活動を行う。(時間外活動) ○専門家の方々に発表をし、今後の PR 活動への方向性をもつ。(1)	○久喜市主催のジュニアプレゼンアワードやストリートフェスティバルを活用することで、学びを校外へつなげられるようにする。 ○専門家の方々と意見交換をする時間を設け、子どもたちの発表だけでなく、互いに対話を通して共創できるように指導や事前準備を行う。 	態③ 知③ 発言記述
課題の設定	【小单元③提燈祭りアンバサダーとして地域へPRを行おう！(27時間) 1月～3月】 ○自分のオリジナル PR グッズを使って、ランキングを上げるためにどこにどのように PR 活動をすればよいか話し合う。(4) ・市役所、駅、図書館など人が集まる場所が良いと思う。	○自分達が作った木札と缶バッジとパンフレットを配布するためには、多くの人が集まる場所が良いことと自分達で直接配布ができる場所であることの2つの視点を与え、活動の方向性を話し合うように計画する。 ○事前に、関係各所には配布が可能かどうか確認をしておき、子供たちの話し合いで出てきた場合、誰にどのように話を聞けばよいのか適切なアドバイスができるようにしておく。	思① 発言記述

情報の収集	<p>○市役所や観光協会、県観光課などから情報を集め、提燈祭りの魅力を発信するのに適した場所はどこか探し、効果的にPRができる場所や相手を明確にする。</p> <p>(2)</p>	<p>○活動場所の選定にあたっては、子供達との十分な話し合いを行う。教師の一方的な決定ではなく、子供と教師が納得できる形で場所を選定できるようにする。</p>	思② 発言記述
整理分析	<p>○収集した情報を基に、効果的に提燈祭りの魅力をPRできる場所と自分達でできることを分析し、PR活動の場所を選定する。</p> <p>(2)</p>	<p>○PR場所が選定した後には、どのようにPRをすればよいのか場所に応じて活動の仕方を検討する必要性について助言をする。</p>	思③ 発言記述
まとめ表現	<p>○久喜小学校のオープンDAY（地域に向けた授業公開）で行う第1回PR活動に向けて準備を行う。(9)</p> <p>○オープンDAYで地域の人に向けて発信をする。(4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の人見てもらえて、嬉しかったです。 ・「初めて知ったよ」と言ってもらえて、自分達の活動は意味があると感じました。 	<p>○地域の人にPRで伝えたいことを明確にして、必要なものを考えられるように声掛けをする。</p> <p>○看板や動画、スライド、ポスターなど子供達の思いや願いに寄り添いながらも、相手意識をもった効果的な表現方法について考えられるような話し合いの場を設ける。</p> 	知③ 思④ 発言記述
整理分析	<p>○第1回PR活動を振り返り、校外での活動に向けて何を工夫・改善すればよいのか話し合う。</p> <p>(2)</p>	<p>○校内の活動と違い、校外では、相手の都合もあるため、看板や成果物の置き場所、どのようにPRをすればよいのか等、相手意識と目的意識をもって話し合えるように助言する。</p> <p>○PR場所との綿密な打ち合わせを行う。</p>	思③ 態② 発言記述
まとめ表現	<p>○PR発表会や宣伝活動（商店街、ショッピングモール、駅等）を行い、地域住民や専門家に向けて提燈祭りのPRを行う。(4)</p> 	<p>○当日は安全に配慮し、引率ができるようする。</p> <p>○直接体験の直後に振り返りを記述できる時間を確保し、体験で得た感覚や気付きを言語化できるよう指導を工夫する。</p> 	知③ 発言記述
一年間の振り返り	<p>○今までの活動と久喜提燈祭りのPR活動の中でつながってきた人々の思いや願いを関連付けて考え、これまでの活動を振り返り、自分達の成長や身に付いたイノベーション力について話し合う。(3)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提燈祭りのPRを行い、地域に発信することで祭りの魅力が広まったと思う。自分達ができることは精一杯取り組むことができた。地域の方に缶バッジを渡したときに、喜んでいる姿を見て自分達の活動は意味があるものだったのだと感じた。これからも自分ができることを一生懸命に取り組み、地域行事にも参加したいと思う。 	<p>○スライドショー形式で写真や成果物を用意することで、一年間の活動を振り返ることができるようする。</p> <p>○子供たちが自分の活動に向き合える個人の時間と全体で共有する時間に分けることで、自己変容と自己の成長を実感できるようする。</p> <p>○次年度のイノベの活動への意欲がもてるよう、自分達で学び進めてきたことに対して教師から価値付けを行う。</p> 	態③ 発言記述

7 活動の実際

(1) 「情報収集→整理・分析→課題設定」の探究のサイクルを意図したカリキュラム・デザイン

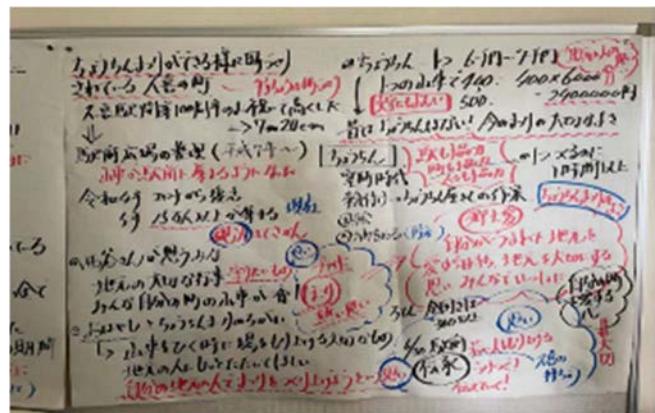
本校では、総合的な学習の時間を質的にも量的にも充実させることを目指し、4月、5月に教職員全体で総合的な学習の時間のカリキュラム・デザインに関する研修を実施している。この研修では、教職員が実際に地域に出てフィールドワークを行い、教科書や題材との関連を検討することで、「総合」で扱う内容の学習的・体験的価値を明確にする工夫を重ねている。

特に本单元では、「情報収集→整理・分析→課題設定」という探究のサイクルを意図的に繰り返す構成を重視した。地域との関わりを通じて得た実体験や、書籍・インタビューなどを通して収集した情報を、すぐに整理・分析する時間を毎回確保している。例えば、体験活動の翌時間には必ず個人での「整理・分析」の時間を1時間設け、その後に全体での共有・分析の時間を1~2時間行うことを、年間指導計画に明記し、全学級で実施している。このように、体験直後の振り返りを意図的・計画的に取り入れることで、子供達は得られた気付きや感情、情報を知識として再構成し、次なる探究へとつなげていく。そして既存の知識や価値観と結び付けながら問い合わせを深め、学習の方向性を主体的に定める姿が見られるようになった。

また、総合的な学習の時間の充実には教職員の協働が欠かせない。十分な教材研究の時間を確保することで、一年間で身に付けさせたい資質・能力をより具体にイメージし、共有することができた。



単元づくり研修の様子（写真1）



ゲストティーチャーの話を模造紙で整理した掲示物（写真2）



教材化された模造紙を見ながら、友達と協働し整理・分析する子供（写真3）

(2) 生成AIを活用した「個人の整理・分析」と「思考の可視化」

探究活動をより深めるために、生成AIを子供達の「思考の相手」として位置付けた。例えば、「久喜提燈祭りの魅力を小学生らしく伝える方法を20個教えてください。」といった具体的なプロンプトを用いることで、子供たちはAIから提案された多様なアイデアを吟味しながら、自分たちに合った活動を模索していくようになった。曖昧な指示ではなく、目的を明確にした対話形式のやり取りを行うことで、「自分たちにとって効果的なPRとは何か。」という問いをもって思考を深める姿が見られた。また、教師はAIに対して子供たちが入力したプロンプトや応答内容を把握できるため、思考の変容や課題を可視化し、的確な支援につなげる手がかりとすることことができた。生成AIを活用する

ことで子供達の思考が深まり、より質の高い探究活動を行うことができた。

提灯祭りで子供たちがかつやくできるアイデア30個だしてください。

(3) 生成AIを活用した整理・分析時における「クラス全体の傾向把握」と「分析の質の向上」

振り返りの活動では、子供達の記述量が多く、教師が一人一人の変容や気付きを把握することに時間がかかるという課題があった。

そこで、ゲストティーチャーの話や児童の振り返りの文などのテキストデータを生成AIに読み込ませ、共通点・相違点・傾向の要約などを自動で行わせた。これによって、教師は話し合いの資料として分類済みのシートを配布し、子供達は全体の傾向を踏まえて自分の気付きを比較・分析することができるようになった。また、生成AIの分類に対して「本当にそうかな。」と自ら再構成を試みる姿も見られ、自らの体験や視点に根ざした思考の深まりが促された。加えて、QRコードによるアンケートやシール型アンケートの結果も生成AIで集計・可視化した。グラフや表などを活用することで、根拠に基づいた話し合いが生まれ、より論理的で建設的な対話の実現につながった。



提灯（ちょうちん）祭りは、幻想的な光と地域の絆を感じられる素敵な行事ですね。子供たちが「お客様」としてだけでなく、祭りの「主役」や「担い手」として活躍できるアイデアを30個提案します。

1. 制作・準備で活躍する

- マイ提灯作りワークショップ：自分の名前や好きな絵を描いた提灯を作り、当日の行列に参加する。
- 巨大提灯のアート制作：子供会などで1つの大きな提灯にみんなで手形や寄せ書きをする。
- 竹の切り出し体験：大人の指導のもと、提灯を吊るすための竹を山から切り出す手伝いを

生成AIへ問い合わせの画面の様子（写真3）



生成AIが整理したテキストマイニングを見る姿（写真5）



地域のイベントでのアンケート収集の様子（写真6）

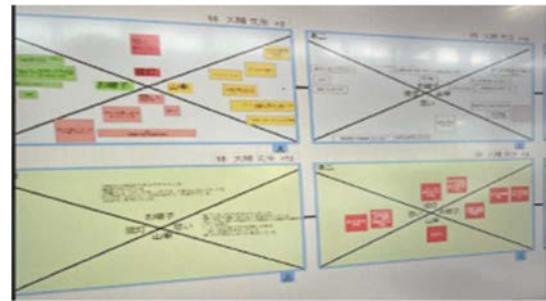


生成AIが整理したグラフを見て考える姿（写真7）

(4) 思考スキルを働かせるために、板書とクラウド共有シートを用いての整理・分析の時間

整理・分析の場面では、子供達が思考スキルを働かせながら情報を処理し、自分の考えを深めることが重要である。そこで、座標軸やXチャートなどの思考ツールをクラウド上にシート化し、児童がリアルタイムで他者の意見を参照したり、自らの考えを書き込んだりできるようにした。このようなクラウドツールの活用により、情報の共有がスムーズになり、話し合いの中で新たな視点に気付く場面が多く見られた。授業では、まずクラウド上で個人あるいはグループによる分析活動を行い、その後、全体での話し合いの中で、教師が板書を通して意見を構造的に整理する時間を設けた。教師による板書は、全体の意見を可視化・統合する役割を果たし、子供達はそれを基に自分の立場や考えを明確にしたり、振り返りや次の活動へつなげたりしていた。さらに、こ

うした板書画像やクラウド共有シートを生成AIに読み込ませることで、授業の振り返りや子供達の理解度を分析することも可能となった。生成された分析結果は、次時の導入資料として活用したり、子供の省察を深めるきっかけとして効果的に用いたりするなど、学びの質の向上につながった。



クラウド上の共同編集型思考ツールシート（写真8）



クラウド上の共同編集型思考ツールシートと連動させた子供の気付きを整理し、構造的に分析する板書（写真9）

（5）自分の思いを深化させ、相手意識をはぐくむ地域との共創活動の設定

自分達の思いと地域の方々の思いを重ねた表現活動として、オリジナルのガチャガチャやパンフレットの試作品を製作した。その後、久喜提燈祭りに関わる方々から批判的な視点でアドバイスをいただく会を意図的・計画的に設定した。これは、子供達同士での意見交換だけで終わらせず、実際に手に取ってもらいたい地域の方々や祭り関係者から直接助言を受けることで、子供達がより真剣に表現活動に取り組むことをねらいとしたものである。試作品披露会でいただいた意見や感想は、クラス全体で整理・分析を行い、自分たちの思いと地域の方々の思いを関連付けた成果物へとつなげていった。

このように、試作品づくり→地域の方々への披露・助言→改良に向けた検討（整理・分析）→試作品の改良→再度の披露というプロセスを繰り返す地域の方々との共創の場面を何度も設定した。

さらに、各段階で整理・分析の時間を必ず確保することで、子供達は自分の思いを深め、地域の方々に対して堂々と語る姿へと成長していった。また、対話を通して地域の方々の思いをより深く理解する姿も見られるようになった。

表現活動においては、自分本位で成果物を作るのではなく、実際に手に取っていただく地域の方々や、年間を通して関わっていただいた久喜提燈祭りの関係者、地元のケーブルテレビの方々などに披露し、意見をもらいながら改良を重ねることで、「久喜提燈祭りを地域に広げたい」という子供の思いが、より本物のものへと育っていった。



自分の表現物を地域の方に披露しアドバイスをもらう
（写真10）



自分の表現物を地域の方に披露しアドバイスをもらう（写真1-1）



自分の表現物を地域の方に披露しアドバイスをもらう（写真1-2）

9 成果と課題

○成果

- ・資質・能力の育成に向けて、どのような学び（活動や体験）を設定するかを意識してカリキュラム・デザインを行うことで、目指す資質・能力の育成に向けた総合的な学習の時間のカリキュラムを構築することができた。
- ・生成AIの活用により、全体の傾向や話の要点を短時間で把握・確認できるようになり、子供達が「思考」「対話」「分析」といった本来注力すべき学習活動に十分な時間をかけられるようになった。
- ・情報の整理・分析の際に、生成AIを活用することでより精緻に分析することができた。そうすることで、子供達の活動の質が高まり、育てたい資質・能力の育成がより確かなものとなった。
- ・教師が、子供達のプロンプトや応答から思考の変容を把握できるようになり、個別支援や育成したい資質・能力の評価の質が向上した。
- ・子供達は、「自分にもできることがある」という自己効力感を育みながら、地域の一員として主体的に行動する力を身に付けた。
- ・地域人材との対話を通した共創活動（複数回の表現→整理・分析の時間の往還）により、対象に対する子供達の思いや表現する相手への意識が高まり、育成する資質・能力へつながった。



地域の方々の思いを受けて市役所でPR活動を行う姿（写真1-3）

●課題

- ・生成AIの位置付けや使い方について、子供と教師の間で共通理解を形成する必要がある。
- ・生成AIを「答えを与える存在」と誤認せず、「思考を支援する相談相手」や「探究のきっかけ」として正しくとらえる視点をはぐくむ必要がある。
- ・情報活用能力、批判的思考力、協働的な学びなどの資質・能力の育成に向けて、生成AIを活用する際の明確な視点や目的の共有が不十分である。
- ・学習の目的と手段を意識した授業改善を、さらに推進していく必要がある。
- ・年間を通して継続的に関わることができるゲストティーチャーの確保や、日常的に情報発信を行っている専門家との連携を図るために、学校運営協議会などの仕組みを活用することも検討できる。校内に存在する地域とのつながりを通じて、総合的な学習の時間をより社会に開かれたものへと発展させていくことが求められる。

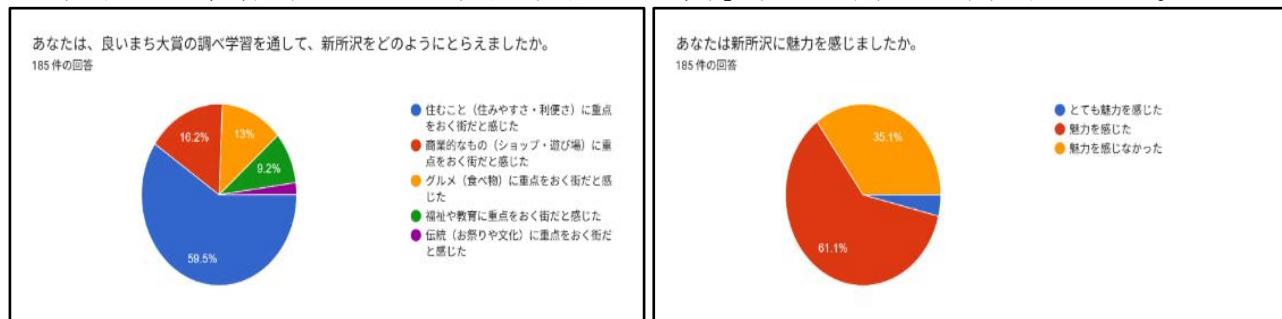
指導事例（3）

中学校【第3学年】シントコロザワのミライをつくる【4月～1月】 ～ICT 機器の活用と中間発表会による情報収集の工夫～（55時間）

本実践では、本校の生徒たちが3年間で取り組んだ探究的な学習の集大成である。持続可能な形で様々な探究課題に取り組んできた生徒が、最後に取り組んだ「地域探究」の記録である。「シントコロザワのミライをつくる」の単元では①自身を知る②地域を知る③地域の課題を見つけ、情報収集をし、分析したのちに、大人に伝えるという活動の3段階で実践を行った。

1 生徒の実態と教材について

本校の生徒は、自分たちが住んでいる「新所沢」について「どのような街だととらえているか」という問い合わせに対して、「住むこと（住みやすさ・利便さ）」（59.8%）という認識だった。続いて多かったのが「商業的なもの（ショップ・遊び場）」であった。グルメ、福祉や教育、に関しては低い認識であり、最も低いものが「伝統（お祭りや文化）」（2.2%）という認識であった。



また、「あなたは新所沢に魅力を感じましたか」に対しては「とても感じた・感じた」と答えた生徒が64.7%、「感じなかった」と答えた生徒が35.3%となった。そこで、充実した総合的な学習の時間の中学校生活3年間の集大成として①自己探究②「埼玉住み心地の良いまち大賞」③

「シントコロザワのミライをつくる」と3段階の計画を立て、探究学習（地域探究）を行った。生徒たちは、上記のデータでもあるように自分たちの住む新所沢について「住みやすい」と感じており、一方で「今を楽しめる場所がない」と感じている。このような生徒の姿から、新所沢の未来をつくっていく人材を、全員が地域で過ごす最後の「中学校3年生」で取り扱うことが、社会に出たときに未来を切り開いていく力につながると考えて実践を行った。

2 単元の目標

新所沢についての探究的な学習を通して、新所沢の地域の特徴やよさに気づき、現状を理解し、新所沢の発展を願って自分にできることを考え、協働しながらよりよい新所沢地区の在り方を伝えようとすることができるようとする。

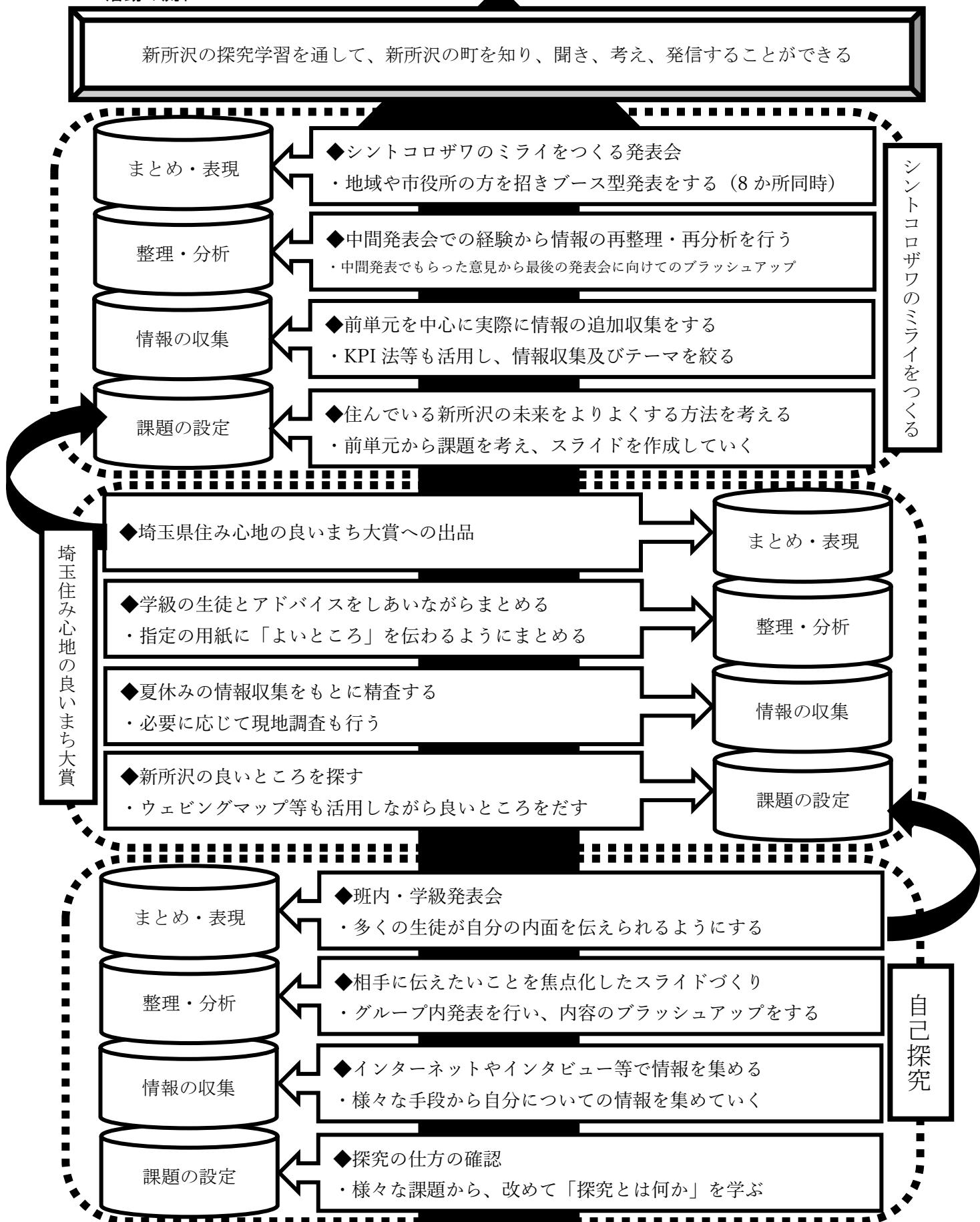
3 探究課題

「新所沢のまちの魅力と、発信方法の工夫」

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
①新所沢に住む人々のニーズや、地区の地理的な特徴や文化的な特徴を理解している。 ②調査活動を様々な手段（インターネット、インタビュー等）で適切に実施している。 ③新所沢地区の発展のために解決すべき課題について探究的に学習してきたことの成果であることに気付いている。	①新所沢についての探究活動を通して感じた関心をもとに課題を見つけ解決の見通しを持っている。 ②新所沢の地域について情報を様々な手段で効率的に収集し、種類にあわせて分類している。 ③新所沢のよりよい在り方のために情報を整理して考えている。 ④新所沢のよりよい在り方のために、相手にあった伝え方を考えている。	①新所沢についての探究活動を通して、自分の地域での在り方について考え、取り組もうとしている。 ②自分の考えだけでなく他者の意見を取り入れながら協働して課題の解決に取り組もうとしている。 ③新所沢地区の人々とのかかわりの中で自分にできるこを見付け、地域の一員としてかかわろうとしている。

5 活動の流れ



6 単元の指導計画・評価計画（55時間扱い）

◎探究課題

「新所沢のまちの魅力と、発信方法の工夫」

これまでの学習との関連

・所沢探究（2年生：総合）

・起業ゼミ（1年生：総合）

探究の過程	○学習活動 ・予想される生徒の意識や姿	○指導上の留意点	評価規準 評価方法
課題の設定	○夏休みの課題の説明をする（1）	○第3学年なので無理のない範囲で、夏休みにも情報収集を行えるように指示をだしておく。	態① 発言
	○受験勉強の合間に「新所沢の地域を実際に見ておく」塾帰り・旅行・日々の生活の中で情報収集をしておくことを伝える（1）	○第3学年であるため、生徒の主体性を重んじながら生徒の自主的な活動に任せる。 ○夏休み中の問い合わせ担当を決め、困ったときに相談できる体制を整えておく。	態③ 記述
情報の収集	○現在の所沢の様子を見る（1） ・地域を見る ・お店を見る ・公園を見る ・地域の方々を見る	○所沢の様子を見る際は、私有地に入ったりしないように事前指導をしておく。 ○メモする用紙を配布し、記録できるようにしておく。 ○生徒一人一人の着眼点が違っていていいことをあらかじめ伝えておく。	態③ 発言
	○昔の新所沢の様子を聞く・調べる（1） ・家族や親せきに聞いてみよう。 ・近所の方に聞いてみようかな。 ・インターネットで調べてみたよ。 	○家族や親せきに聞く場合は、今と昔の違いについて聞くようにアドバイスをする。 ○近所の方等に聞く場合は、仕事等の邪魔にならないようにアポイントを可能な限りとらせるように指導する。 ○インターネットで調べる場合は、情報の真偽について変わるように指導する。	態① 発言
	○新所沢と他の場所の様子を比べる（1） ・旅行先と新所沢を比べる ・家族の地元と新所沢を比べる ・親戚の居住地と新所沢を比べる	○旅行の際は、家族の迷惑にならないように指導する。 ○親戚等の居住地を調べるときは、迷子にならないように指導する。	態③ 発言
	○新所沢で「困ったことがあったとき助けてくれる場所・人」を調べておく（1） ・助けてくれる場所を調べる ・助けてくれる人を調べる	○調べる際には、正しい情報を得られるように工夫することを促す。	態③ 発言
整理分析	○シントコロザワウェビングマップを作成する（1） ・新所沢について、調べてきたことをウェビングマップに書き出して整理していきました。次は友達のマップと比べてみたいな。	○調べてきたことからウェビングマップをつくり課題を整理分析する。 ○ウェビングマップを作成するときは多くの情報が出るようになります。 ○教員はアドバイスを与えながらできる限り多くの意見ができるようにする。	思③ 記述

まとめ表現	<ul style="list-style-type: none"> ○ウェビングマップの共有を行う (1) <ul style="list-style-type: none"> ・新所沢について、みんなで知っていることを出し合ったよ。自分が知らないこともたくさんあって、面白いな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ウェビングマップを共有する中で、自分の中での問が生まれるように促す。 ○共有の時は、「気になるものを質問してみる」「自分ならこのよう広げ方をするな」という視点で話し合いを促す。 ○教員も自分のマインドマップを黒板に書きながら多角的な視点から生徒の思考を促す。 	態② 行動
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○「埼玉県住み心地の良いまち大賞」に関するオリエンテーションを行い、作り方やポイントを説明する (1) <ul style="list-style-type: none"> ・新所沢は住みやすい街だな。 ・いいところはどこか迷うな。 ・あまりよくないところは見つかってきたよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「埼玉県住み心地の良いまち大賞」についての説明をする。 ○課題意識をしっかりと持たせる。 ○課題解決に必要な調査の方法を考えられるように促す。 	思① 行動
情報の収集	<ul style="list-style-type: none"> ○インターネット検索を行う (2) <ul style="list-style-type: none"> ・こんないいところもあったのか。 ・調べると意外と知らなかつたことがあるな。 ・知らない場所とよく知っている場所があるな。 ・意外に古い歴史があるのだな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○新所沢について調べるきっかけを幅広く伝える。 ○自己選択を大切にし、伴走することを意識する。 ○それぞれの生徒の興味を持っていることを深堀りさせる。 	思② 記述
	<ul style="list-style-type: none"> ○夏休みに調べたものを活用する (2) <ul style="list-style-type: none"> ・夏休みの時に調べたものと、今調べたもので違いがあるな。 ・お店によって違う表現を使いながら自分のお店をPRしているのだな。 ・1号店だったのか。 ・様々な動物がいるのだな。 ・所沢市でも面白い活動をやっているのだな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○インターネットの情報と実際に見た情報の違いについて具体的に書かせる。 ○生徒によって調べるもののが違うため、生徒とともに考え伴走していく姿勢で考えていく。 	態② 記述
	<ul style="list-style-type: none"> ○追加の現地調査を行う (放課後) <ul style="list-style-type: none"> ・できる限りで実施しよう。 ・ここ少し聞いてみたいな。 ・みんなはどうするのだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○放課後の活動になるため安全に配慮するように促す。 	態③ 記述

	<ul style="list-style-type: none"> ・親や親せきに昔のことを聞いてみよう。 		
整理分析	<ul style="list-style-type: none"> ○目を引く題材の決定を行う（4） <ul style="list-style-type: none"> ・見出しあは大きくした方がいいかな。 ・配色を迷うな。どのようにしたら伝わる表現になるかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○興味のある課題に出会えるように生徒と多くの対話をする。 	思③ 作成物
	<ul style="list-style-type: none"> ○良さを引き出すために比較しまとめる。（2） <ul style="list-style-type: none"> ・新所沢の線路を挟んだ東と西を比較してみよう。 ・他の市町村と比較してみよう。 ・五感でかんがえてみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒同士での対話を促し、繰り返し良さについて考えさせる。 ○良さを引き出すために、良くない点についても考えさせる。 	思③ 作成物
まとめ表現	<ul style="list-style-type: none"> ○「埼玉県住み心地の良いまち大賞」の作成（画用紙）および提出を行う（4） <ul style="list-style-type: none"> ・上手く作れてうれしいです。 ・外部の方に客観的に評価してもらえるのはドキドキするな。 ・他の人はどんなものをつくったのかな。 ・いいところがたくさんあったな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒が上手くまとめられるように支援する。 ○外部に評価してもらう機会をつくる。 ○次の課題設定につながるようにする 	知③ 思④ 作成物
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○「シントコロザワのミライをつくる」オリエンテーションを行う（1） <ul style="list-style-type: none"> ・今回が最後の活動になるな。 ・僕たちが新所沢のこれからについて考えることができるのは、とてもわくわくします。 	<ul style="list-style-type: none"> ○最終課題であることを伝える。 ○一つ前の課題「埼玉県住み心地の良いまち大賞」との関連を明確にさせる。 ○前回の課題を経験し、新所沢に正のイメージ、負のイメージどちらを抱いていても「ミライをつくる」という上位目標をもち活動させる。 	態① 行動
情報の収集	<ul style="list-style-type: none"> ○様々な方法を使って情報収集しながらスライドをつくる（3） <ul style="list-style-type: none"> ・まずは、公共のものについて調べようかな ・私は福祉について調べてみようかな ・住み心地の良いまち大賞でまとめた内容を深堀しようかな ・私は新しいもの調べたいな ・みんなは何にするのだろう 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒の情報収集の方法を尊重しながら実施していく。 ○住み心地の良いまち大賞から考える生徒、新たな視点で考え始める生徒それぞれにあわせて支援していく。 	態② 行動 ワークシート

整理 分析	<ul style="list-style-type: none"> ○KPI法を用いて分析をする(2) <ul style="list-style-type: none"> ・様々な視点で分析すると、次にどうしたよいか分かってきたよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○KPI法を用いて、プラスの面、マイナスの面、面白いと感じる面などの多岐にわたる視点から考えることができるようになる。 	思② 行動
	<ul style="list-style-type: none"> ○KPI法を用いたうえでスライドを修正する(4) <ul style="list-style-type: none"> ・納得のいく発表ができるようにがんばります。 	<ul style="list-style-type: none"> ○スライドの修正は時間をかけて行う。適宜教員が支援しながら中間発表を目指していく。 	知② 行動
まとめ 表現	<ul style="list-style-type: none"> ○「シントコロザワのミライをつくる」中間発表会を行う(3) <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなテーマで新所沢について発表し合うことができたので、とても充実しました。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分とテーマの違う生徒同士で簡単に中間発表をし、内容で気になる部分の共有を行う。 ○形式的なものではなく、数人で効率よく行い、そこで出た質問や疑問から修正につなげていく。 	思① 発表
情報の 収集	<ul style="list-style-type: none"> ○中間発表をもとに足りない内容を調べなおす(3) <ul style="list-style-type: none"> ・発表をしてみたら上手く伝わらなかつたな。 ・アドバイスをもらったところを付け加えよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○友達や他グループの意見を基にしながら、発表内容のプラッシュアップを行うように声掛けを行う。 	知② 行動
	<ul style="list-style-type: none"> ○中間発表を経て情報収集と仲間への意見をもとにスライドを作成する(3) <ul style="list-style-type: none"> ・いわれた部分のスライドをもう少し改善してみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○スライド作成時には、スライドがわかりやすくなるように担当の教員が支援することができるようしていく。 	知② 行動
整理 分析	<ul style="list-style-type: none"> ○スライドを見直して修正する(4) <ul style="list-style-type: none"> ・より伝わりやすいスライドにするためにはどうすればいいかな。 ・もう一度友達に聞いてみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○伝えたいことを再度整理してまとめていくことができるよう、これまで蓄積してきたデータを振り返ることができるようになる。 	思② 作成物 思③ 作成物
まとめ 表現	<ul style="list-style-type: none"> ○「シントコロザワのミライをつくる」発表会をおこなう(5)  	<ul style="list-style-type: none"> ○発表最初の時間は体育館8ブースでの同時発表(授業公開)を行う。 ○スライドを用いて8~10分間の発表を行うようとする。 ○視点をもって質問をすることができるようとする。 ○よいところを記入して相互に伝え合うことで、まとめ方のよさについても振り返ることができるようとする。 	思④ 発表 作成物
	<ul style="list-style-type: none"> ○市役所の方・地域の方・小学校の先生・高校の先生・大学の教授などの先生方を招く(1) <ul style="list-style-type: none"> ・外部の方に見てもらうは緊張するな・頑張って伝わるように発表しよう 	<ul style="list-style-type: none"> ○外部の方からのコメントを積極的にもらい、自分たちの学習の成果を自覚することができるようとする。 	思④ 発表 成果物
まとめ 表現	<ul style="list-style-type: none"> ○シントコロザワのミライをつくるの活動を終えての振り返りを行う(2) <ul style="list-style-type: none"> ・この先も住んでいきたいな ・もう少し、地域の活動にも出ていきたいな 	<ul style="list-style-type: none"> ○単元を振り返り、自分の暮らす町への見方が変容してきたことに気付くことができるようになる。 	思④ 記述 態③ 記述
	<ul style="list-style-type: none"> ○3年間の総合的な学習の時間の振り返りを行う(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ○単元を振り返り、自分の成長に気付くことができるようになる。 	態③ 記述

7 活動の実際

『3年間のカリキュラムの再編成』

3年間をかけて以下のようにカリキュラムの再編成を行いながら総合的な学習の時間を実施してきた。特に意識した点は、「探究的な」再編成したことである。グループワークやミニ発表会など、生徒が活動的になるようにした。

学年	ジャンル	学習活動
第1学年 (令和3年度)	自然 職業 探究活動	○富士山の自然を体験してまとめよう ○職業について調べて発表しよう ○起業ゼミ（探究活動）（外部企業とのコラボレーション）
第2学年 (令和4年度)	文化 伝統 地域① 地域②	○日本・海外の文化について調べてまとめよう ○日本・海外の伝統について調べてまとめよう ○「魅力的な京都の地域パッケージをつくろう」の実施 （探究活動）（外部企業とのコラボレーション） ○所沢の魅力的な場所について班・クラスでまとめて発表し、比較しよう
第3学年 (令和5年度)	探究の集大成 自己 地域③ 地域④	○単発の探究課題の実施 ○自分と他の価値観の違いを知ろう（自己探究） ○「埼玉住み心地の良いまち大賞」の実施 ○メイン単元「シントコロザワのミライをつくる」の実施 （地域探究）

また、資料は年度ごと・ジャンルごとに分けて共有し、改変をすることを前提にしながら目の前の生徒にあったブラッシュアップを行い、その後改めて資料を保存して、年度ごとの蓄積をした。持続可能かつ、目の前の生徒にあった形で共有している。その後も、この文化は続き、私が総合的な学習の主任を退いた後も同様にタテのつながりを維持しながら教育活動が展開されている。令和6年度には修学旅行の際に、所沢市と京都市を比較するために企業・施設訪問を行った。令和7年度は令和5年度から継続している新所沢に関する探究活動を1年次の職場体験の訪問先にプレゼンをする活動を行うそうである。このように、持続可能な形で、中心の職員が変わってもつながっていっている。

（1）本実践の実践年度（令和5年度）における【情報の収集】の工夫

①インターネットによる情報収集

インターネットでの情報の収集は一般的ではあるが、本実践でも利用した。その際、信頼性の高いサイト（公的機関・医療機関）などを基にすることを改めて指導し、出典を明記することを大切にさせた。



②限定された環境下での情報収集

タブレット端末を活用し、限定された環境下に情報を置き、その中で試行錯誤・取捨選択しながら情報収集を行わせた。これによって協働の場面は意図的に増え、課題解決に向かって取り組む様子が見られた。

③実際に足を運んでの情報収集

夏季休業等を使って、一部の生徒は自ら足を運んで情報収集をおこなった。実際に道路の標識の数を数える生徒、電車の時刻表や運行スケジュールを聞きに行く生徒、塾の先生や近所の方に新所沢について聞く生徒など多岐にわたった。



④協働による情報収集

本実践では、「中間発表」や成果物の途中経過の共有を適宜行い、他の生徒からの意見（または視点）を入れるようにした。この協働では意見の視点を増やすため、他者との聞き合いの際に、似たテーマを選んだ生徒同士のみでなく、異なるテーマを選んだ生徒の発表も聞くようにした。

(2) 3年間を通した【情報の収集】の工夫

①図書室の活用

入学当初の情報収集では、校内にある図書館を活用した。タブレット端末の使用開始が1学期中ごろになることもあり、司書教諭に依頼し、適切な書物を準備していただいた。この際、参考文献や出典の記載、信頼性の高い情報についても学んだ。

②校外でのインタビュー

コロナ禍で職場体験の実施ができなかつたため、4日間の「起業ゼミ」を行った。校外活動を実施し、地域の様々な方にインタビューした。事前にアポイントメントをとりインタビューする生徒、街頭で地域の方にインタビューする生徒など様々な直接的な情報の収集をした。特にこの活動は、3年次の地域探究につながり、インタビューすることへのハードルが下がったと感じている。

③協働しながらのインターネット検索

第2学年後半からはタブレット端末を用いたインターネット検索を中心に情報収集を行った。情報収集後に、同じ班の生徒同士で相談しながら、意見を交換し、改めてスライドを再構築し、情報収集を再度行う活動を行った。これによって、ただ調べるだけでなく、仲間の視点という客観的な観点からの情報収集が可能になった。第2学年の最後では、所沢の白地図に、所沢市の魅力的な場所についてまとめた。まずは個人の記憶をもとにしながら情報収集を行い、その後はインターネットを活用し、所沢市にはどのような魅力があるのかをまとめた。その後、班単位で白地図にシールをはりながら、視覚的に情報を確認した。最後に学級全体で白地図と文章でまとめ、各クラスで発表した。協働×インターネットでの情報収集により、調べる力だけでなく、整理・分析する力も育まれたのではないかと思う。

8 ○成果と●課題

○令和5年度の「埼玉県学力学習状況調査」の質問紙調査で3つの項目が顕著な変化がでた。1つ目は「グループやペアで、話し合ったり、意見や考えを出し合ったりして課題を解決したこと」2つ目は「課題の解決に向けて、話し合ったり交流したりしたことで、自分の考えをしっかりと持てるようになったこと」3つ目は「話し合いや集めた資料から、自分の考えが変わったり、深まったりしたこと」である。この3つの項目では、肯定的な意見を占める割合が約9割となった。県の平均や市の平均と比べると非常に顕著に高い結果となった。また、令和5年度2年生の「埼玉県学力学習状況調査」の質問紙調査でも3年生に続き肯定的な意見の割合が高かった。

○3年間の様々な活動で、情報収集に関する様々な引き出しが身に着いたことで、実際に生徒が情報収集に行く際の多くの手法を生徒が取捨選択できるようになった。特に3年間で大きな経験となつたのは「1年時の起業ゼミ」での情報収集である。地域に出て地元の方にインタビューをしに行き、学校へ帰ってきた際の充実感は表情や目の輝きから感じ取ることができた。学校生活の中でこのような目を引くほどの表情は見ることがなく、教員も実感する場面となつた。

○学校全体で取り組むために令和5年度の校内研修のテーマとしても一致させて行った結果、先生方のマインドセットの変化と授業改善につながつた。総合的な学習の時間は教科書がないため、先生方の力量も試される。しかし、自分の経験を織り交ぜたり、生徒とともに学んだり、一緒に考え伴走したりすることで、一人一人の先生方の指導力が向上し、学校全体の教育力の向上に寄与できたと考えられる。

●一方で令和6年度3年生では、前年度の3年生に比べて、肯定的な意見の割合が多少低くなってしまった。これは、持続可能な教育活動を行うために資料等の共有等は行っていたが、肝心の「目的」の共有が他学年の教員間で不足していたことが原因であると考えられる。

●また、生徒の情報収集の際に、様々な方法で取り組ませるため、初期段階での情報モラル教育が不十分であったと感じた。特に出典や画像の使用に関して今後より一層教員側の学びが必要である。そして、実際のインタビューの際、グループでの活動であったため、同じ生徒が情報収集をし、それについていくだけの生徒が出てしまった。バランスの良いグループ設定をし、集団での課題と個人での課題を明確にして取り組ませることの必要性を感じた。上記のことを踏まえて、「目的」や「手法」を精査しながら、教員同士の連携も強く図りながら今後は活動していきたい。

2 第34回生活科・総合的な学習の時間教育研究発表会報告

(1) 期日 令和7年7月31日(木)

(2) 方法 オンライン開催

(3) 指導者 淑徳大学教育学部こども教育学科 教授

岡野 雅一 先生

(4) 研究発表並びに研究協議

司会者：伊藤 淳子（加須・鴻巣小）

石井 竜司（本庄・児玉小）

小泉 侑治（長瀬・長瀬中）

記録者：小淵 昂希（上尾・今泉小）

牧野 涼子（所沢・牛沼小）

①本物に触れる体験を大切にした授業づくり

～たのしいあきいっぱいの実践を通して～

提案者 熊谷市立新堀小学校 八木真奈美

②総合的な学習の時間における概念形成の実現に向けた指導法の研究

～子供の認識の変容を目指して～

提案者 松伏町立松伏第二小学校 田村 浩基

③総合的な学習の時間のカリキュラムマネジメント

～負担のない持続可能な総合的な学習の時間の充実を目指して～

提案者 所沢市立美原中学校 新井 孝幸

本物に触れる体験を大切にした授業づくり ～「たのしいあきいっぱい」の実践を通して～

熊谷市立新堀小学校 八木 真奈美

1 主題設定の理由

生活科学習指導要領には、「生活科における気付きは、諸感覚を通して自覚された個別の事実であるとともに、それらが相互に関連付けられたり、既存の経験などと組み合わされたりして、各教科等の学習や実生活の中で生きて働くものとなることを目指している」と記載されている。

そこで、秋の魅力に気付かせ、自然の中で一人一人の思いや願い、気付きを生かした多様な遊びを展開させることで、体全身を使って秋の自然にどっぷり浸らせ、秋の美しさ、不思議さ、秋遊びの楽しさや面白さに気付けるようにしていきたいと考え、本主題を設定した。

2 実践について

単元「たのしいあきいっぱい」（全 22 時間）

- 【第一次】こうていであきをみつけよう
→校庭で秋見つけをする。
- 【第二次】こうえんであきをみつけよう
→公園で秋見つけをする。
- 【第三次】あきのしぜんといっしょにあそぼう
→校内で見つけた秋を使って新堀山で秋遊びをする。
- 【第四次】あきのことをつたえよう
→秋遊びで楽しかったことやおすすめの遊びを紹介する。
- 【第五次】あきのおもちゃをつくろう
→秋の自然物を使っておもちゃを作る。
- 【第六次】あきのおもちゃフェスティバルをしよう
→秋の自然物で作ったおもちゃを使って、友達と遊びを楽しむ。



主題に迫るための手立て

(1) 場づくりの工夫

①校内における学習の場の設定

活動場所を「新堀山」とし、校内で自然物を集める時間を十分に確保した。また、自然に触れる時間を大切にし、一時間の中でも活動の時間を充分に設けた。

②校外における学習の場の設定

活動場所を「別府沼公園」とし、新堀小との違いに注目させた。また、別府沼公園までの行き帰りも秋に触れ合う時間を大切にした。

(2) 学習活動の工夫

①児童の意欲につながる声掛け

振り返りカードや活動の様子から、秋を見つけたり感じたりする児童の気付きを受け止め、認める声掛けや支援を行った。

②他教科との関連

国語科「だれが、たべたのでしょうか」「たのしかったことをかこう」

図画工作科「たいせつボックス」算数科「10よりおおきいかず」「かたちあそび」等

(3) 前年度の実践をもとにした PDCA サイクルによる授業改善

①集合隊形を教師対児童の対面から、児童対児童の円形に変更した。

②製作遊びができるような環境から、広々と遊べる環境（お試しコーナー）に変えた。

< (3) ①集合隊形の見直し >



< (3) ②お試しコーナー >



3 成果と課題（○成果 ▲課題）

○本物に触れ、秋という自然に気付き親しむ児童が多かった。

○本単元を通して、児童の意欲的な活動がたくさん見られた。

○めいっぱい自由に楽しむことのできる場の設定をすることで、児童一人一人が秋に夢中になる姿が見られた。

▲おもちゃ作りの時間では、秋のおもちゃを作つて満足してしまう児童が多かった。試行錯誤するための場の設定や声掛けの工夫が必要であったと考える。

総合的な学習の時間における概念形成の実現に向けた指導法の研究 ～子供の認識の変容を目指して～

松伏町立松伏第二小学校 田村 浩基

1 主題設定の理由

総合的な学習の時間において、生きて働く知識すなわち概念が形成されることが求められている。「生きて働く知識」こそ子供の自己更新や質の高い問題解決を支えるものとなるからだ。一方でこの「概念」という言葉が授業者にとって分かりにくく、馴染みにくいことが指摘されている。本研究では、総合における①概念形成とは何か②どのように実現するのか③なぜ必要なのかということを整理し、授業者にとって分かりやすく、馴染みやすい形で提案することを試みた。

2 実践について

先行研究を基に本研究では、総合的な学習の時間で期待する概念形成を「最初は○○と思っていたけど」→「本当は□□だった！」という子供の姿で定義した。そしてこの変容を以下の単元により実現できるよう本校第5学年で実践した。

【単元名】歴史に残そう！二小のよさ！～45周年を祝うデジタル写真展～（全30時間）

【探究課題】学校の歴史及び発展を支える人々の思いや願いと、写真という表現方法のよさ

【目指す概念形成・・・“二小のよさ”に関する認識の変容について】

単元開始時の子供たちは、“二小のよさ”を「先生が優しい」「給食が美味しい」などと捉えていた。そこで単元終了時には、“二小のよさ”を「時代が変わっても、その年々の子供・地域・保護者の協力により、学校生活を創ってきたことは変わらない」ことだと気付けるよう単元を構成した。

【主な学習活動】①本校創設から昨年度まで、44年分の写真から、写真展で展示したい写真を選ぶ活動②45年目の“今”「二小の歴史に残したい」写真を撮影する活動

活動①の作品

抽出児の活動②の作品



【抽出児の変容について】

単元開始時の抽出児童にとっての“二小のよさ”は、「遊具が楽しい」「給食が美味しい」などだった。単元終了時には「昔から地域の人と協力していること」と結論づけた。この結論に至るまでに本児童が得た新しい知識は、次のようなものだ。それは「下校の見守りの人は最後の一人が帰るまで必ず門にいる」「学童の先生が毎日出迎えたり、門限に厳しくしたりするのは、自分の安全のため」「下校路には子供を守るための看板や横断幕がたくさんある」ことなどだった。

3 成果と課題（○成果 ▲課題）

○「○○と思っていたけど」→「□□だった！」の○と□に言葉を当てはめることで、概念的知識の設定、学習内容の設定ができる。また、「→」部分でその変容を実現するために必要な「経験」「事実」「人との出会い」を想定することで、単元の大枠をイメージすることができる。

▲設定した内容、獲得させたい知識に子供の思考を強引に仕向ける必要がある。

総合的な学習の時間のカリキュラムマネジメント ～負担のない持続可能な総合的な学習の時間の充実を目指して～

所沢市立美原中学校 新井 孝幸（前任校：所沢市立向陽中学校）

1 主題設定の理由

（以下、本校は所沢市立向陽中学校についての記述である。）

本校は、埼玉県の南西部にある所沢市の北西部に位置する住宅街と畠に囲まれた学校である。小学校3校から進学してくる中で、学校教育目標である「自律・貢献・共生」を目指して学校の教育活動が行われている。私は、2校目として赴任し、10年間在籍し、9年間担任として3サイクル（1年～3年）生徒たちを見てきた。本校の生徒の特長としては、①自ら進んで行動できる生徒が少なく、学力の高さに対しての行動力にやや難を抱えていること。②自分の考えを伝えることや他者の考えを聞いて、自分の考えを再構築する経験が乏しいこと。③地域への関心があまり高くないこと。などがあげられる。これらの生徒の実態を踏まえて、総合的な学習の時間のカリキュラムを再編成した。特に後述する3点を意識した。①3年間をかけて生徒が主体的に取り組む活動を中心とすること。②教員や時代が変わっても、持続可能な形で総合的な学習の時間に取り組むことができ、なおかつ、活動が充実すること。③教員全体で意見交換ができ、その学年の生徒の実態に応じて対応できるものにすること。「2 実践について」ではその取り組みを紹介する。

2 実践について

（1）【実践以前】当時の先輩教員の実践の工夫

1998年に告示された学習指導要領の実施に伴い、2000年代では総合的な学習の時間に取り組まれていた。当時は「インスタントカメラをもって地域の写真を撮ってくる」等の、生徒の探究心をくすぐるような活動をしていた。2010年代になると、講師を招いて講演を聞いたり、映像を見て感想を書いたりという取り組みに変化していった。

（2）【1年目（令和3年度）】カリキュラムマネジメントの開始

- ①【1年】校外学習の事前学習とし、「自然」をテーマにSDGsと関連した探究学習の実施
- ②【1年】外部企業と連携し、4日間の「起業ゼミ」の実施及び職業についての学習

（3）【2年目（令和4年度）】実践の継続と継承

- ①【2年】修学旅行に向けて、「国際理解」と「文化」についてのグループワーク
- ②【2年】外部企業と連携し「私が提案！魅力的な修学旅行パッケージ」の実施及びプレゼン
- ③【2年】地域「所沢市」をテーマにした学習

（4）【3年目（令和5年度）】実践の継続と外部への発信、継承及び変遷

- ①【3年】「自分を知るプロジェクト」自己探究の実施
- ②【3年】「埼玉住み心地の良いまち大賞」最後の単元の事前学習
- ③【3年】「シントコロザワのミライをつくる」地域探究の実施

（5）【実践後（令和6年度）】実践の修正

- ①修学旅行中に京都・奈良の企業を訪問し、SDGsへの取り組みを聞く→地域探究の実施

3 成果と課題（○ 成果 ▲ 課題 ★ 考察）

- 【令和5年度3年生】質問紙調査(47)～(49)より、多くの話し合いやグループワークを行い、「自分の考えをしっかりと持てるようになった」と「自分の考えが変わったり深まったりした」の肯定的な意見が大幅に県平均・市平均を超えた。
- 【令和5年度2年生】質問紙調査の(50)～(52)にかけてが同様に県平均・市平均を超えた。
- ▲【令和6年度3年生】県平均・市平均よりは高いが前年度のように著しい結果ではなかった。
- ★このことから、「活動への想い」に関する部分の教員間の連携も重要であると考える。

3 授業研究委嘱校報告

所沢市立北秋津小学校

1 日 時 令和7年11月20日(木)

2 授業者 第1学年 田中まこと 教諭 下村昂矢 教諭

3 単元名 「にこにこ大きくせん～おうちもにこにこ、じぶんもにこにこ～」

4 授業の概要

本単元では「にこにこ大きくせん」と称した活動を通して、家庭生活において児童自身が成長することを目指した。家庭での生活に対して受動的になってしまふことが課題だと捉えている。本単元での学習活動を通して、児童が自分を家族の大切な一員であると改めて認識し、そのよさを感じることができるようにしていく。そして、より家庭生活に主体的に参画していく態度を養っていく。指導にあたっては、お手伝いだけではなく、家庭生活において児童が自分でできることを一人で行ったり、規則正しい生活を心がけたりすることも、家庭の笑顔を増やす方法であるという視点をもつことができるようとした。家庭で「さくせん」を実施したあと、より笑顔を増やすために計画を見直し、再度活動に取り組むことで、児童が常に活動の必要性を感じられるようにした。活動の内容を共有する際には、写真や絵を用いて行うことで、より具体的に伝え合えるようにした。



5 授業を振り返って

○めあてについて

本時では「さくせんを みんなおして、もっと たくさんのにこにこを あふれさせよう！」をめあてとし、学習を進めた。導入を簡潔に済ませ、児童がゴールをイメージしやすいめあてとした。改善点として「どんなときに家庭の笑顔が多いか」をおさえてからめあてを提示することで、より児童の主体性が高まったのではないかと考える。児童の思いや願いを膨らませるめあての提示を心がけたい。

○ I C T の活用について

本時では、家庭での活動を記録する際に I C T 端末を使用し、写真撮影を行った。児童は友達の写真を見ながら想像を膨らませたり、自分の活動の参考にしたりしていた。具体的に対象を写すことができる点や、共有が容易である点において、写真のよさを活用することができた。



○「さくせん」の計画について

児童は、自分の家庭での取り組みを振り返り、そこでの思いをもとに「さくせん」をよりよくアップデートさせていった。「さくせん」を行う日程を調整したり、そうじをする場所を増やしたりするなど、1度目の取り組みを踏まえて考える様子が見られた。主体的に家庭生活をよりよくする方法を考え、自分事として学習に取り組んでいた。

6 指導講評

元文教大学 教授 嶋野道弘先生

○授業づくりについて

生活科の授業は、自分を中心に、「社会や自然、ときに自分自身とのかかわり」「相互行為を通じて自分の存在を認識すること」「有意義性を感じること」によって、よりよいものとなる。児童が自分自身の可能性を感じられるように、教師は「できそうかどうか」「どのようになればよいか」を問うことが大切である。

○本時の授業について

家族の笑顔を増やすという「他者意識」は、まず「自己意識」から生まれるものなので、家族がにこにこした時に、自分もにこにこしたという経験を振り返り、その往還によって生活を豊かにしていくことを気付けるような学びになるとよい。本時の板書について、児童の活動の流れや、グループ発表の話し方などの掲示が中心であったが、児童が家庭で集めた「にこにこ」をたくさん書いていくと、動的機能をもつ効果的な板書になる。板書に子供の思いや願いが集まるようにするとよい。

加須市立大桑小学校

- 1 日 時 令和7年11月26日（水）
- 2 授業者 第2学年 長谷川 拓也 教諭
- 3 単元名 「大桑パーク～ぼくとわたしのおもちゃばこ～」
- 4 授業の概要

本単元では、今回の生活科の研究において、物語性のある単元構想にするために、「人」と「環境」の発掘を行った。おもちゃの魅力に触れ、魅力そのものを高めるために、外部指導者であるおもちゃコンサルタントを招集した。おもちゃコンサルタントとの出会いを通して、何種類ものおもちゃと出会い遊び方を教わり、自分が作りたいおもちゃを作つて遊ぶという目標を子供主体で立てるようにした。学びの主体を子供たちにするためには他者に目を向ける単元構想（利己的な考え方から利他的な考え方の変換）が必要であると考える。そのため、学習の成果を発揮できる環境（表現の場）を構想した。

本時では、参観した先生方が授業に参加できる公開授業として位置付けた。子供たちは、適切な評価を先生方からもらうことを目指して、自分たちのおもちゃのテーマパークの工夫について発表するための練習や、先生方を呼び込むための集客の練習などを本時に向けて取り組んだ。教師が子供たちの学習の成果を活かす環境（表現の場）を意図的に構想することで、P D C Aサイクルの機能を効果的に発揮できるようにし、学びの主体を子供たちとすることを目指した。

5 授業を振り返って

○「学びの主体を子供たちに」を目指した単元構想について

他者へと意識を向けていくように単元を構想していったため、学習を自己ごととして捉え、主体的に学習に取り組むことができたと考える。特に、おもちゃコンサルタントといった外部指導者や地域施設である加須元気プラザの職員と子供たちがつながるように人材を意図的に発掘することで主体的な学習に取り組むことができた。



○学習の成果を活かす環境（表現する場）について

子供たちが学習の成果を活かし、表現することができる場を設定していくことが、児童が主体的に学習に取り組んでいくために大きな効果が得られると感じた。今回は単元に①就学予定の5才児へおもちゃのプレゼントをする場面、②公開授業で先生方におもちゃランドを披露し、評価を得る場面、③大桑フェスティバルでおもちゃランドを披露する場面、④加須元気プラザでおもちゃランドを披露する場面と、学習の成果を活かす環境を意図的に設定したことで、P D C Aサイクルを効果的に機能させることができたと考える。



6 指導講評

元共栄大学 教授 小川 聖子 先生

○本時の授業から

単元の構想がしっかりと立てられていて、子供たちは目的意識をもって主体的に学習に取り組めていた。外部指導者や地域施設を活用し、単元を構成することは子供たちが学習に対して主体的に学習に取り組める大きな要素である。また、単元のゴールについて子供たちがしっかりと理解していたため、本時で先生方から適切な評価をもらうために一生懸命学習に取り組む様子が見受けられた。

7 本時の指導案

以下のURLよりご覧いただけます。

<https://drive.google.com/file/d/1n2G-cEDUOpOGK9x9mEPY2ScmWj5AHxvW/view?usp=sharing>

新座市立栄小学校（低学年ブロック）

- 1 日 時 令和8年1月20日（火）
- 2 授業者 第1学年 黒瀧 勇介 教諭
- 3 単元名 「もうすぐ2年生～すこしづつ すこしづつ～」
- 4 授業の概要

本単元は、学習指導要領の内容（9）を基に構成している。入学してからの1年間を写真や動画、成果物を用いた振り返りや自分の成長についての保護者へのインタビュー、クラスの友達とできるようになった事を伝え合う活動を通して、自分でなく周りからの視点でも成長に気付くことができるようにならなかった。また、学習面や生活面、内面的な成長に気付くことができるようになることで、たくさんの成長を実感し、進級への期待感を膨らませることを意図して進めていった。

本時では、自分のできるようになったことについて、クラスで交流する活動を通して、学習面や生活面、内面的な成長など、多様な成長に気付くことができるようにならなかった。

5 授業を振り返って

○児童の発言への問い合わせについて

本時では、「入学してから今までにできるようになったことはありますか？」という発問に対する児童の発言を基に授業を展開していくようにした。その際、児童の発言に対して「どうして？」「どんなことをしたの？」などの問い合わせをした。そうしたことによって、無自覚な気付きを自覚できるようになり、気付きの質を高めることができた。また、教師の問い合わせに対してつぶやく児童も多く見られた。教師がつぶやきを拾い、全体に広めることも、気付きの質を高めることに繋がった。



○思考ツールの活用について

児童の思考を整理した板書にするために、思考ツールを活用した。思考ツールを活用することで、学習面や生活面の成長が関連付けやすくなったり、内面的な成長に気付くやすくなったりすることが分かった。また、自分のできるようになったことが「学習面」「生活面」「内面」の成長のどれに入ると悩んだり、二つの成長に入ると考えたりしている児童もいた。このことから相互に関連したり、重なる部分もあったりすることに気付いていた。



6 指導講評

さいたま市立木崎小学校長 佐野 公子 先生

○問い合わせについて

児童が「友達が頑張っているのを見て、自分も頑張った。」など、思考を深められるような発言をした時には、「なんでそう思ったの？」といったことを問い合わせし、対話を重ねることで、自分の成長に気付くことができるようになっていく。

○整理・分類について

意見を板書しながら分類し、どのような視点で分けているのかを児童自身が気付くようにする方法も考えられる。本時のめあてである「多様な成長に気付く」ためには、児童の考えを分類し、整理した方が効果的である。また、分類に迷う場面でも、児童の思考が深まる様子が見られる。なお、「学習面」「生活面」「内面」などの分類は、あくまで学習指導における暫定的なものであり、必ずしも明確に分ける必要はない。

○成長単元について

1年生ではある程度教師がマネジメントしながら学習を進めたり、2年生では振り返る範囲を広げたりするなど、発達段階に応じて発展させていくことも大切である。また、低学年では記入したプリントが増えていくような量的なことでも自分の成長を実感でき、自信に繋がる場合がある。

新座市立栄小学校（中学年ブロック）

- 1 日 時 令和8年1月20日（火）
2 授業者 第4学年 斎藤 紗也加 教諭
3 単元名 「仲間になろう～手を取り合える地域を目指して～」
4 授業の概要

本単元は「地域のみんなが共に手を取り合いながら生活できる幸せな栄にすること」を目指している。地域には、福祉の里といった施設やお年寄りが多く暮らしている。その方たちと気軽に挨拶できる関係こそが「共に生きること」に繋がるのではないかと考えた。子どもたちは、福祉の里や地域のお年寄りにインタビューをして、高齢者についての理解を深め、自分たちと差異がないことに気付いた。更に、インタビューを通して「関わわりたい！」という意欲を高め、みんなが楽しめるような交流会を開催し、子どもたちが高齢者の立場になってともに考えることができるような授業展開とした。

本時では、第2回交流会に向けて、高齢者ともっと仲良くなるための手立てを考えた。友達の反省点を自分事として捉え、アドバイスする活動を行った。

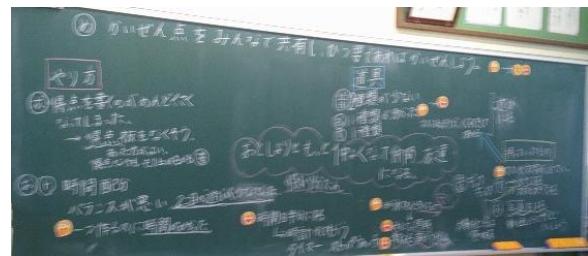
5 授業を振り返って

○板書について

本時では、子どもたちの意見を整理しながら板書した。その際、遊びごとにカテゴライズするのではなく、改善が必要な視点ごとにカテゴライズしたことで、自分との繋がりや改善策、工夫を見付けたり考えたりすることができ、効果的であった。

○環境の工夫について

時系列に沿って教室内に掲示物を掲示し、これまでの経験を振り返るようにした。また「班で大切にしてきた思い」「自分が感じた良かった点と改善点をまとめた座標軸」「班で出し合った改善点」をホワイトボードで掲示し、どこでも誰でも確認できるようにした。さらに、大型電子黒板に前時の板書を映し出すようにした。この3点から、友達の思いに沿った意見を伝えたり相手の気持ちに寄り添つたりできるようにし、子どもたちの整理・分析に生かすことができた。



6 指導講評

埼玉県教育局南部教育事務所学力向上推進担当指導主事 若村 健一 先生

○教室環境について

掲示物によって、子供たちが何の情報を得て、学びにどういかせるかという視点で環境構成をしていく。今回の授業は、教室のどこにいても互いの意見が見えるように計算されていた。環境構成を教師が意図的にすることが非常に大事で、子供たちの学びが豊かになる要素である。

○授業の中での教師の役割

ある児童が「メモするのが面倒で自分たちがつまらなくなってしまった。」と話していた時に、この時点では子供たちはまだ自己基準であった。その後、教師が他のグループの意見と、意図的に繋ぐことによって、最後の振り返りでは、その児童の中で、改善策の方向性が決まっていた。教師が他のグループに意図的に話を振っていったことで考えが変容したと考えられる。意図的に教師が考えを関連付けて、子供たちから共通する部分が出てくることがよい。全体で話し合うことで、グループで活動しているだけでは気付かないところに気付くということも大事な視点である。個別最適な学びのみではなく、協働的な学びとセットにしていくことで、子供たちの学びはより充実する。

新座市立栄小学校（高学年ブロック）

- 1 日 時 令和8年1月20日（火）
- 2 授業者 第5学年 奥澤 真子 教諭
- 3 単元名 「栄ファーム開園！～「食」への挑戦～」
- 4 授業の概要

本単元は、自分たちが野菜を育てたり、農作物を育てている人々と関わったりする中で、食べ物を大切にする思いを育み、身の回りの食への感謝などを起点として、自分たちができるることを主体的に考え、自ら課題を設定し、探究していく力を養っていく。最初に、自分たちの力だけで二十日大根を育て、野菜を栽培することの難しさを実感することで、よりよく野菜を育てるについて課題意識をもたせていった。次に、地域の農家さんの協力の元、自分が育てたい野菜を試行錯誤しながら育てることで、農作物が育つ喜びや農家さんの努力に気付いていく。最後に、今までの経験を通して気付くことができた感謝の思いなどを、支えてもらっている人へ発信していくようにする。

本時では、食への挑戦に向けて、自分たちの思いを形にするための課題設定をおこなった。野菜を育てることを通して得た成果や課題等を振り返りながら、食について考えたことを友達と共有し、自分ができる挑戦を決めていった。

5 授業を振り返って

○今まで経験や活動を振り返ることについて

今までの経験や活動を常に振り返ることができるよう、教室の周りに掲示物を貼った。自分たちの失敗から「次は成功させるために、どのようにすればよいのか。」と本気で課題に向き合い、主体的に活動に取り組むことができていた。



○ICT端末を活用した共有ノートについて

本時では、子供同士がどんな思いをもっているのか、共有ノートでリアルタイムに確認することができた。全体の意見を集約するためのツールとして活用し、他のグループの意見も可視化することで、他の人の意見も聞きたいという意欲に繋がり、話し合いが活発になった。



6 指導講評

久喜市立久喜東小学校長 田上 智明 先生

○本時の授業について

今回の授業では、本時のめあてを子供の言葉から立てており、子供たちの問い合わせから始まる授業になっていた。一方で、課題設定についての話し合いや挑戦カードの設定等、やりたいことを詰めすぎて、話し合う内容について、学級で共通理解する時間が足りなくなってしまったと感じた。教師は、子供の思いを丁寧に引き出したり、言葉を待ったりすることが重要である。多くの活動について、優先順位を確認し、その時どきに応じて、一番大切な活動を厳選して行うようにしていきたい。



○総合的な学習の時間の学習過程について

探究のプロセス（課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現）を大切にした単元の構成となっていた。単元の導入は、ストーリー性を大切にする必要があるため、材への出会い方を工夫するようにしたい。単元の最終段階で、学校全体で総合発表会を位置付けておくと、相手意識を明確にもって取り組むことができる。また、単元を通して、「食とは？」という概念を形成することができるよう計画されていた。概念の変化は単元の最初と最後で問うことで、捉えやすくなる。

4 令和7年度講演会記録

演題「次期学習指導要領における生活科・総合的な学習の時間に求められるもの-構造化・探究・教育課程-」
文部科学省初等中等教育局主任視学官 田村 学 先生

1. 教育課程の基準の改訂

【有識者検討会論点整理・大臣諮詢】

○諮詢理由

子供たちを取り巻くこれからの社会の状況

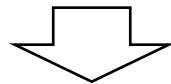
- ・不確実性の高まり
- ・労働市場の流動性の高まり など

現在の学校現場の状況

- ・「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善
- ・一人一台端末環境も活用した精力的な授業改善 など

課題

- ①主体的に学びに向かうことができない子供の存在
- ②学習指導要領の理念や趣旨の浸透は道半ば
- ③デジタル学習基盤の効果的な活用



子供たちが社会で活躍する時代を展望すると、初等中等教育が果たすべき役割は大きい
教育課程の実施に伴う教師の負担への指摘に真摯に向き合う必要性

○諮詢事項

①質の高い深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方

- ・中核的な概念

事実に関する知識 例) トマトは花が咲くと実がなる。ナスは花が咲くと実がなる。
「野菜は花が咲くと実がなる」という **概念** の獲得

方法に関する知識 例) こうすればこうなる

「いつでもどこでも自在に使える」という **方略** の獲得



実際の社会で活用できる資質・能力

②多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方

- ・柔軟な教育課程編成

例) 目黒区 小学校は1単位時間を40分、中学校は45分 コマ数を増やして1015単位時間と同じにする。その増えた分を余剰とし、学校固有の学習活動に当てる。

渋谷区 各教科の授業を10%短くできる時数特例を使う。減った分を総合に上乗せする。

③各教科等やその目標・内容の在り方

- ・質の高い探究的な学びの実現→総合的な学習の時間の探究をもっと充実させていく。

④教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合うことを含む、学習指導要領の趣旨の着実な実現のための方策を行う。

2. 学習指導要領の構造化

【主体的・対話的で深い学び】

○「深い学び」の子供の姿とは？

例) 総合的な学習の時間の「米作り」→農薬使用の是非が話題になる。

学ぶうちに農薬に関するいろいろな知識や情報が手に入り、農薬の持つ意味や価値に気付く。

例) 福岡の生活科「町たんけん」の振り返り

「いろいろな仕事があることが分かった。どの仕事も違うけれど似ていることが二つある。

一つはほとんど大変だということ。もう一つは誰かのためにするということ。」

例) 広島の総合的な学習の時間「平和学習」で平和劇を作る

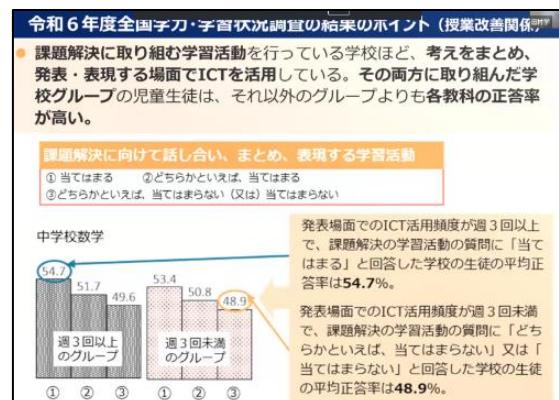
一番大事なセリフ「あなたは一人じゃない、あなたの後には、未来をたくしたひとがいる」

どうして?と教師が問いかける。子供たちの発話を聞き、一人目の子の発話の質が上がってい

○主体的・対話的で深い学びの実現のための配慮事項

教師の指導性の発揮が不可欠。主体的・対話的で深い学びの実現には、教師と児童生徒が相乗効果で高め合っていく授業が必要。

課題解決に取り組む学習を行うとともに、考えをまとめ、発表・表現する場面でICTを活用しているグループは、全国学力・学習状況調査での正答率が高い傾向がある。「GIGA×深い学び」についてStuDX Styleで事例を公開予定。

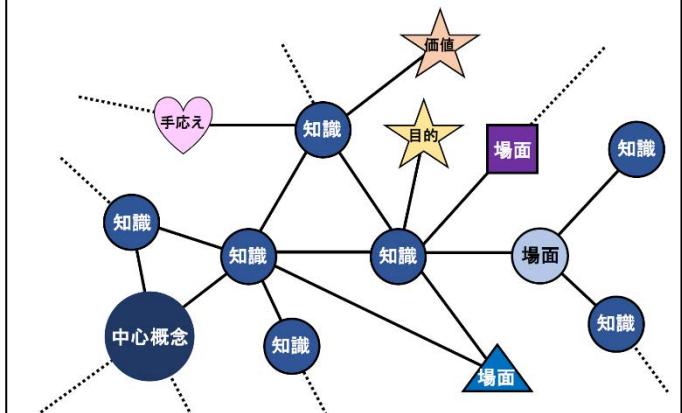


【知識の構造化（精緻化）】

○事実的で個別な知識→概念的で構造的な知識

概念の獲得こそが、いま求められていることである。その重要なキーワードは「つなぐ」である。一つひとつの知識がつながり、ネットワーク化され、構造化していく。これを「深い学び」と捉えると、イメージしやすい。知識・技能をつなぐ（関連付ける）こと、そして「活用・発揮」、すなわち書く・話すなどのアウトプットをどう行うかが鍵になる。アウトプットをいかに潤沢に、かつ質高く行うかが重要である。

複雑に絡み合う「知識の構造」



もちろん、インプット（内化）が不要なわけではない。しかし、アウトプット（外化）を重視することで、頭の中の知識がつながり、ネットワーク化していく。つながった知識は剥がれ落ちにくく、長期にわたって保持される。これこそが「記憶」である。

【活用・発揮による精緻化】

○活用・発揮して情報を処理する→長期記憶

- ①精緻化：既存の知識と結びつける。
- ②有意義化：意味を持たせる
- ③体制化：同じ仲間をまとめること
- ④イメージ化：具体と結び付けたり図式化したりする
- ⑤感情化：好ましい感情情報と結び付ける。繰り返し反復も大事だが、それしか知らない先生とアウトプットも大事だと分かる先生では授業のバリエーションが変わってくる。

3. 探究の質的向上

【学力向上と総合的な学習の時間の相関】

知識・技能をつなぐ(関連付ける)ために、「活用・発揮」をする機会として重要なのが「探究のプロセス」である。

例えば、【情報収集】では社会科の資料活用能力を生かし、【整理・分析】では、算数数学の統計データの活用能力を生かすことができる。【まとめ・表現】では、国語の文章作成能力を活用できる。各教科の知識・技能は繰り返し発揮することができる。

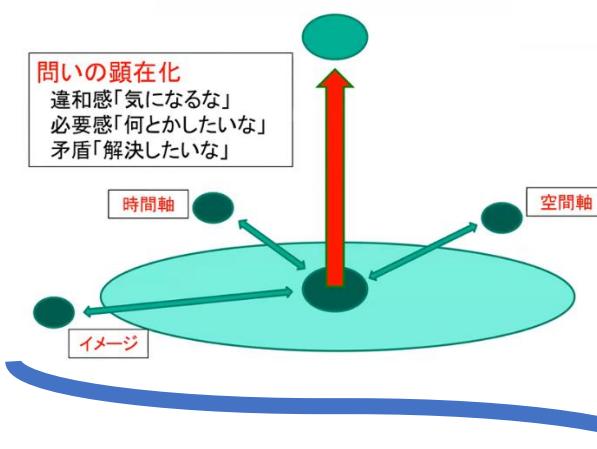
総合的な学習の時間で「自分で課題を立てて情報を集め整理し、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組む児童生徒と学力の相関が表れている。また、O E C Dのシュライヒャー局長は、「日本の学力は一度下がったが、また上昇傾向にあるのは、総合的な学習の時間の影響であり、世界的なトレンドともつながっている。」と述べている。

○探究の時間と入試

高校においても、探究の学習がトレンドになっている。その理由としては、大学入試における総合型と言われるA O入試が全体の50%を超えており、高校時代に探究学習を行ってきた高校生の方が大学入学後、自身の能力を自分で伸ばしたり大学を活性化させたりすることができるわかってきたり、大学も受け入れたいという動きになってきている。

【探究のプロセスにおける課題の設定について】

「課題の設定」



①問題状況の把握

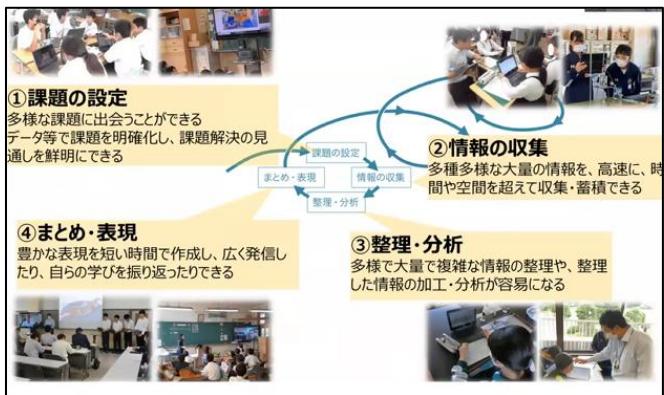
- ・昔と比べる
- ・他の地域を比べるなど

②問い合わせの顕在化させる

- ・違和感
- ・必要感
- ・矛盾

身に迫った、
切実感のある
課題を設定する

教師が児童生徒に適切に関わり、指導性を発揮することで課題解決に向けた主体的・対話的で深い学びに向かう



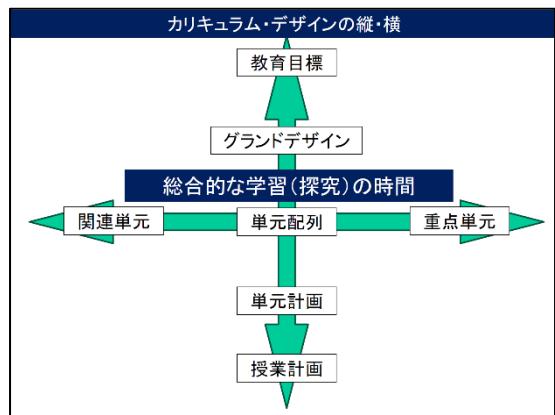
○ I C T 端末活用の価値

- ・質の高い課題設定が可能、課題解決の見通しをもつ。
- ・大量、多様、高速、時空を超えて情報の収取可能となる。
- ・質の高い情報処理と思考力の発揮を行う。
- ・豊かな表現と自らの学びの振り返りを行う。

4. 柔軟な教育課程の編成

【カリキュラムデザインの縦と横】

学年間・学年内での学びの連続性や発展性を意識して内容を系統的に積み重ねる「縦」の視点と、教科等横断的な関連付けや、地域・実社会・他者とのつながりを生かして学びを広げ深める「横」の視点を統合的に構想する考え方である。両者を往還させることで、個々の学習を意味ある全体として位置付け、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。



【教科横断的な指導について】

生活科や総合的な学習の時間と各教科の重点的な単元を結び付けようとする事は丁寧だが、単元配列表が複雑すぎると分かりにくくなり、使い勝手が悪くなってしまうこともあることから、以下の2点の視点で教科横断的な指導を行いたい。

○教科→生活科・総合的な学習の時間

国語で学習した「相手に分かりやすく、順序立てて話す」力を、生活科や総合で活用することは、教科で育てた資質・能力を実際に活用・発揮する場となる。これは教科にとっても、生活科・総合にとっても互いにメリットのある関係である。

教科では、資質・能力が身に付くように、場面・状況・対象を意図的に設定することで育成していく。一方、生活科や総合では、現実生活の中で、様々なノイズが入り込む状況において、その資質・能力を使いこなす場を検討していくことが大切である。

こうした実践を繰り返すことで、教科で身に付けた資質・能力が本物へと育っていく。

○生活科・総合的な学習の時間→教科

生活科や総合で扱っている対象を、教科に関連させることも重要である。例えば、総合で米作りに取り組むと、子どもは米作りや農業への関心を高め、その知識も豊かになる。そうした子どもたちが、5年生の社会科で「日本の農業生産」を学ぶとき、総合での米作りの経験が学びを促進し、関心の高さから多様な情報が集まり、学習が一層充実したものになる。生活科・総合と教科の単元を連動させることで、目指したい資質・能力をより確実に育成することができる。



5 令和7年度事業報告

埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会

月	令和7年度 事業計画		
4月	4日（金）	○ 事務局幹事打合せ会 於：Zoom	15時30分～16時30分
5月	16日（金）	○ 常任理事会（会長・副会長・常任理事・幹事） 於：Zoom	14時～16時
6月	18日（水）	○ 講演会及び総会 於：Zoom 演題「次期学習指導要領における生活科・総合的な学習の時間に求められるもの -構造化・探究・教育課程-」 講師 文部科学省 初等中等教育局 主任視学官 田村 学 先生 24日（火）	14時～16時30分 ○ 第1回 指導法研究委員会 於：Zoom 14時～16時 ・委員の委嘱 ・指導事例集の形式 ・執筆分担
7月	31日（木）	○ 研究発表会 於：Zoom 13時15分～16時30分 (生活) 熊谷市立新堀小学校 教諭 八木真奈美 先生 (総合) 松伏町立松伏第二小学校 教諭 田村 浩基 先生 (総合) 所沢市立美原中学校 主幹教諭 新井 孝幸 先生	
8月	4日（月）	○ 第2回 指導法研究委員会 於：Zoom 9時～12時 ・執筆内容の再検討	
10月	24日（金）	○ 第3回 指導法研究委員会 於：Zoom 14時～16時 ・執筆内容の再検討 ・原稿締め切り 12月上旬	
11月	13日（木） 14日（金） 20日（木） 21日（金） 26日（水）	○ 全国大会（広島・広島市） ○ 授業研究委嘱校発表会 (入間地区) 所沢市立北秋津小学校 ○ 関東大会（神奈川・相模原市） ○ 授業研究委嘱校発表会 (北埼地区) 加須市立大桑小学校	
12月	上旬	○ 研究集録「生活・総合」作成 ・会議は開かず郵送での連絡調整により、研究集録を作成する。	
1月	20日（火）	○ 授業研究委嘱校発表会 (北足立南部地区) 新座市立栄小学校	
2月	18日（水）	○ 常任理事会（会長・副会長・常任理事・幹事） 於：Zoom 14時～16時	
3月	25日（水）	○ 事務局幹事打合せ会 於：Zoom 15時～16時	

6 埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会会則

第一章 名称・事務局・会員

第一条 本会は埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会と称し、事務局を会長指定の学校に置く。

第二条 本会は埼玉県内小学校生活科関係教員・小中学校総合的な学習の時間関係教員を会員とし、埼玉大学生活科・総合的な学習の時間担当教員、県・市町村教育委員会生活科・総合的な学習の時間担当指導主事を特別会員とすることができる。

第二章 目的・事業

第三条 本会は生活科・総合的な学習の時間教育の振興を図ることを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 生活科・総合的な学習の時間教育に関する研究・調査
2. 会員相互の研究発表・指導法の研究
3. 研究成果・資料等の刊行
4. その他必要な事業

第三章 組織・役員

第五条 本会に次の役員を置く。

1. 会長 一名
2. 副会長 若干名
3. 理事 若干名
4. 常任理事 若干名
5. 監事 二名
6. 幹事 若干名

第六条 役員は次の方法によって選出する。

1. 会長は、理事会において選出する。
2. 副会長は、理事会において、東西南北の各地区、さいたま市よりそれぞれ若干名を選出する。
東西南北の地区については、東部（北埼玉・埼葛）、西部（比企・入間）
南部（北足立南部・北部）、北部（秩父・児玉・大里）に分けるものとする。
3. 理事は、各地域教育研究団体生活科研究部・総合的な学習の時間研究部小、中学校より若干名をもってこれにあてる。
4. 常任理事は、各教育事務所管内より各一名又は、二名を選出する。但し、理事会の承認を得て地域の実情を考慮し、その人数を増すことができる。
5. 監事は、総会において選出する。
6. 幹事は、会長が委嘱する。

第七条 役員は次の職務を行う。

1. 会長は、本会を代表して会務を総轄する。
2. 副会長は、会長を補佐し、会長事故ある時はその職務を代行する。

3. 理事は、理事会を構成し会務を審議する。
 4. 常任理事は、常任理事会を構成し会務を執行する。
 5. 監事は、本会の会計を監査する。
 6. 幹事は、本会の庶務会計にあたる。
- 第八条 役員の任期は一年とする。但し、再任することもできる。
補欠役員の任期は前任者の残任期間とする。
- 第九条 本会に顧問及び参与を置くことができる。顧問及び参与は、本会に功労のあつた者又は生活科・総合的な学習の時間教育について学識経験のある者について理事会が推薦し、会長が委嘱する。

第四章 会議

- 第十条 本会の会議は、総会・理事会・常任理事会・その他とし、原則として、会長が招集する。
- 第十二条 総会は、毎年一回開催し、次の事項を行う。但し、理事会をもって、総会にかけることができる。また、必要に応じて、臨時総会を開催することができる。
 1. 会務および決算の報告および承認
 2. 事業計画ならびに予算の承認
 3. 監事の選出
 4. 会則の変更
 5. 役員の承認

総会の議事は、出席会員の過半数をもって決し、可否同数の時は議長がこれを決する。

第十三条 理事会は、会長・副会長・常任理事・理事・幹事で構成し、会務を審議する。但し、会長の委嘱を受けた特別会員を加えることができる。

第十四条 常任理事会は、会長・副会長・常任理事・幹事で構成し、会務の執行、事業の企画、予算案の編成をする。但し、会長の委嘱を受けた特別会員を加えることができる。

第五章 会計

- 第十五条 本会の経費は会費・補助金及び寄付金などをもってあてる。
- 第十六条 本会の会計年度は四月一日から翌年三月三十一日までとする。

付 則

- 第十七条 本会則の変更は、総会の議決による。
- 第十八条 本会則は平成二年十二月七日よりこれを実施する。
(平成3年6月5日 一部変更)
(平成7年6月13日 一部変更)
(平成9年6月11日 一部変更)
(平成11年6月16日 一部変更)
(平成13年6月22日 一部変更)
(平成16年6月22日 一部変更)
(平成19年6月19日 一部変更)
(令和5年6月14日 一部変更)

あとがき

埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会
副会長 萩原 美樹

研究収録「生活・総合」第36号が、本会各地区の先生方の御協力と御尽力をいただき発行できましたことに、心より感謝を申し上げます。

本研究会の活動の大きな事業の一つである夏の研究発表会は、オンラインでの開催でしたが、今年も多数の皆様にご参加いただきました。熊谷市立新堀小学校 八木 真奈美先生、松伏町立松伏第二小学校 田村 浩基先生、所沢市立三原中学校 新井 孝幸先生の3名の先生方に実践を発表していただきました。そして、発表内容をもとに熱心な協議を行うことができました。また、淑徳大学教育学部 教授 岡野 雅一先生には、一つ一つの発表についてとても具体的なご指導をいただきました。参加された皆様も多くのこと学ばれたことと思います。

また、授業研究委嘱校として所沢市立北秋津小学校、加須市立大桑小学校、新座市立栄小学校の3つの会場校において学校や地域の実態を踏まえ、様々な工夫がちりばめられた授業を公開していただきました。元文教大学 教授 嶋野 道弘先生、元共栄大学 教授 小川 聖子先生、埼玉県教育局南部教育事務所 学力向上推進担当指導主事 若村 健一先生、さいたま市立木崎小学校 校長 佐野 公子先生、久喜市立久喜東小学校 校長 田上 智明先生から具体的で細やかなご指導をいただくことができ、充実した研究会になりました。研究会で得た成果や見えてきた課題を分析し、今後の授業実践に生かしていきましょう。

予測困難な時代、社会の急激な変化が叫ばれ数年がたちます。子供たちの未来を見据え、各学校では「人と人が関わり合い」、「学び合い」、「他者と協働して課題を解決していく力」をはぐくんでいくことを意識した実践が積み重ねられていることだと思います。そうした中、生活科・総合的な学習の時間の授業実践の充実に向けて、この研究収録を御活用いただければ幸いです。

結びに、オンラインでの研究発表並びに研究収録の刊行にあたり、原稿や資料など多大なご尽力を賜りました関係者の皆様、御指導・御協力を賜りました多くの皆様に心より御礼を申し上げます。

編集委員の構成

編集長	川口市立在家小学校長	樹子志一
副編集長	滑川町立福田小学校長	み希子
編集委員	上里町立七本木小学校校長	家治司穂子
	桶川市立桶川西小学校教頭	貴裕
	さいたま市立つばさ小学校	徳す
	川口市立辻小学校	昂涼
	上尾市立今泉小学校	美侑
	所沢市立牛沼小学校	竜美淳
	小川町立みどりが丘小学校	澤
	長瀬町立長瀬中学校	本泉井木
	本庄市立児玉小学校	藤村田木
	深谷市立桜ヶ丘小学校	大伊中横鈴
	加須市立鴻茎小学校	典康
	春日部市立中野小学校	
事務局	埼玉大学教育学部附属小学校	
	埼玉大学教育学部附属小学校	

題 字 埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会
元副会長 栗 田 豊 彰

表紙絵 「ぼくのともだち」
加須市立礼羽小学校 1年 大澤 拓実

発 行 者	生活・総合 第36号
発 行 日	埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会 令和8年2月16日